VIEW'S

2009
April
4月

高校版
Volume
1

CONTENTS

2 私を育てたあの時代、あの出会い

最高の学校を目指し生徒と向き合う意志を培った
鹿児島県立鹿屋高校教頭◎松高全一

4 特集

中・高・大とつなげる「学び」と「指導」

6 インタビュー 学びの連続性の中で高校に求められる「自立」の準備と「個性」の伸長
早稲田大大学院教職研究科教授◎安彦忠彦

10 調査分析 中・高・大の接続の課題
データで検証する「中学→高校」「高校→大学・社会」の現状

14 対談 高校3年間で、いかに質の高い学びの場と指導を提供するか
兵庫県立姫路西高校◎山尾孝司／岡山県立岡山朝日高校◎北澤正志

18 調査データから探る指導のヒント

約24%の学生が中学時代までに大学進学を意識
Benesse教育研究開発センター「大学生の学習・生活実態調査報告書」より

19 指導変革の軌跡

20 栃木県立栃木高校
進路検討会◎会議の実質化で担任支援と指導力向上を両立

24 東京都・私立実践女子学園中学校高校
キャリア教育・感性表現教育◎25年後のビジョンを進路決定の柱とし、生徒の意欲を高める

28 福岡県公立古賀竟成館高校
進路意識向上◎厳格な生徒指導と手厚い進路指導で地域の信頼を取り戻す

32 生きたデータの徹底活用

高校生としての学習習慣を新入生に定着させる リニューアル

36 未来をつくる大学の研究室

「柔らかい物質」の特性を解明し新機能材料開発へ道筋をつける
千葉大大学院 融合科学研究科 ナノサイエンス専攻◎上野信雄研究室

40 30代教師の情熱

生徒に「本当の力」をつけ、夢の実現に挑む心を育んでいきたい 新連載
秋田県立能代高校◎柏谷浩樹

42 VIEW'S REPORT

「学びの共同体」の導入で学力向上を目指す
一斉授業から学び合う授業へ——静岡県立沼津城北高校の挑戦

48 VIEW'S SQUARE

本文中のプロフィールは
すべて取材時（2009年2月）のものです。
本文中、敬称略。
本誌記載の記事、写真の無断複写、
複製および転載を禁じます。

http://benesse.jp/berd/ 本誌記事は、Benesse教育研究開発センターのウェブサイトでもご覧いただけます

私を育てた
あの時代、あの出会い

今、振り返る教師としての原点

最高の学校を目指し生徒と向き合う意志を培った

鹿児島県立鹿屋（かのや）高校教頭 松髙全一 MATSUTAKA ZENICHI

教師の仕事である「人づくり」は、必ずしも望んだペースで成果が得られるものではない。一見、停滞に思える時間の流れを受け止め、大きな飛躍を待たなければならないこともある。そのとき、教師を支えるのは「生徒を信じる」という一念しかない。生徒を信じ、自らを叱咤しながらつくる「最高の学校」。常に高みを目指す生き方を学んだ30代の日々を、鹿児島県立鹿屋高校教頭の松髙先生が語る。

撮影◎鹿児島県立甲陵高校にて

右 おかざき・ひろや　国語科。大島高校を経て甲陵高校。高山高校教頭、川辺高校校長、甲陵高校校長を歴任。05年度からラ・サール高校非常勤講師。

左 まつたか・ぜんいち　数学科。鹿屋農業高校を経て甲陵高校。教育委員会勤務後、種子島高校、鹿児島中央高校へ。現在、鹿屋高校教頭を務める。

30歳になった1990年4月、私は鹿児島県立甲陵高校に赴任しました。初めての普通科進学校勤務に、「今後の自分に大きな影響を与えるような、教師としての進路選択のヤマ場となるのでは……」そんな予感と期待を抱いていました。

3学年の理系クラスの担任となったのですが、普通科の進路指導は右も左もわからない状態。そんな私にとってまさに「師」といえる存在が当時進路指導主任の岡﨑弘也先生でした。

まず驚いたのが、岡﨑先生の「面談力」でした。インターネットもシラバスもない時代、先生は面談の中で生徒に「やりたいこと、なりたいものに合った大学」を次々と紹介し、そして合格するために何をすべきかをわかりやすく説明しました。だから、面談が終わった生徒は、明らかに表情が変わるんです。こんなすごい面談ができるようになりたい……心からそう思いました。

3学年の担任団は、しばしば岡﨑先生に「うちのクラスの生徒と話をしてもらえますか」と

先輩教師の言葉

教師の懸命な姿が生徒を強く育てるのです

鹿児島県 ラ・サール高校非常勤講師
OKAZAKI HIROYA 岡﨑弘也

進路指導主任のときは、いきなり私が呼び出すと生徒も不安になるので、偶然廊下で出会ったふりをして、そのまま面談に入ることもありました。だれが担任とかではなく、学年全体で声をかけるようになると生徒はどんどん変わります。ただ、私が面談するときは、できるだけ担任にも同席してもらって、私がどんな面談をするのかをしっかり見てもらいました。それは、若い担任を育てる年長者の責任だと思います。

進路指導部では、3年間を見通した指導計画を立て、生徒に「自分はどんな分野で社会貢献したいか」を考えさせました。生徒が夢を描いたのだから、教師は「何をどれだけ伸ばすか」覚悟しなければならない。だから、先生方に「生徒の成績を何点上げられるか」を聞きました。

面談をお願いしていました。担任なのだから、クラスの生徒のことは自分で何とかしたいという気持ちはもちろんありました。でも、生徒のためを考えれば、岡﨑先生の「面談力」を借りた方がいい。いや、それだけではなく、学年団の先生全員の力で生徒を育てればいいじゃないか。そんな雰囲気がありました。

一方で教師一人ひとりは、生徒のために何ができるかを常に厳しく問われました。進路検討会は、「この生徒はどの大学に合格できるか」ではなく、「生徒の志望をかなえるため、各教科担当はどれくらい成績を伸ばせるのか」を岡﨑先生が確認し、各教師が決意する場でした。「国語で20点、松高先生の数学で30点アップ…よし、じゃあいけるぞ！」。それはすごいプレッシャーでした。でも、生徒が教師を選ぶことはできない以上、まず頑張らなければならないのは、やはり教師です。「教師が努力すればするほど生徒は変わるよ。そして、その変化を見てしまったらもう教師は辞められない」。岡﨑先生からよく言われた言葉です。

「生徒のため」。その言葉をいつも突き付けられた日々でした。「午後7時までは生徒との時間、9時までは同僚との時間、そのあとが自分の時間」。これも岡﨑先生の名言の一つです。結局、1日は生徒のため、学校のためにあるというわけです。実際、話をしにきた生徒に岡﨑先生が「忙しいからあとで」と言ったことは、一度もありません。それほど先生はいつも生徒との時間を一番に考えていました。

そんな姿を近くで見るうちに、私自身も確かに変わり始めました。授業中、生徒の表情を見て「どうもうまく教えられていない」と感じたとき、「ごめん、うまく説明できてないね。もう1回説明し直すから」とすっと言えるようになったのです。曖昧な説明のまま進んでしまって、生徒に不利益を被らせるわけにはいかない。素直にそう考え、授業を仕切り直せるようになりました。

岡﨑先生は2年後の92年に異動され、更に5年後、校長として甲陵高校に戻ってこられました。先生は「私たちは甲陵ファミリーだ」と全校集会で訴えました。先生から、「思った通りにやりなさい」と3学年の学年主任を任された私も、学年団を家族としてまとめたいと思いました。そこで、学年主任時代の岡﨑先生のある取り組みをやってみることにしたのです。

それは毎朝、学年団の先生に「その日の終礼で生徒に話してほしいこと」を伝えることです。ファミリーである3学年の生徒全員に、学年団として毎日メッセージを送るのです。学年主任とはいえ、一番若い私の申し出に「なぜ?」という顔をされる先生もいらっしゃいました。それでも、学習のこと、進路のこと、人生のこと、私のことと、私はいま生徒に伝えたいことをメモにして、先生方に毎日配りました。すると、先生方は次第に私の言葉に自分なりの思いを加え、肉付けをして生徒に伝えてくださるようになったのです。

ファミリーに少しは近づけただろうか……手応えを感じた私ですが、あるとき、出張から帰ってきた岡﨑先生に生徒が「お帰りなさい」と挨拶する場面を目撃しました。校長に生徒がお帰りなさいなんて、本当に岡﨑先生は甲陵ファミリーのお父さんだな……私は驚き、そして「岡﨑先生にはまだまだかなわない」と改めて実感しました。

いま自分がいる学校は家族。だから最高の学校にしよう。教師としての生き方を教えてくれた岡﨑先生は、私にとって大切なオヤジなのです。

生徒も教師も頑張って、それでもだめだったときは生徒は納得して進路変更ができます。それは決して「逃げ」ではありません。松高先生はいつも高い目標に果敢に挑戦してくれました。

3学年主任をやってもらったときは、まわりは年長者ばかり。でも彼はひるまなかった。大したものだと思いました。学年団へのメッセージも、この思いだけは皆に届けようという最低限の保障ですから、実際にはそれぞれの担任が味付けをして生徒に渡せばよい。だから没個性とは全く違いますよね。

教師自身が「自分はこんな教師でありたい」と情熱を語らなければ、生徒も情熱を持ちません。生徒に勉強させたかったら、教師が勉強しないと。松高先生が授業で「ここ、もう1回説明し直すから」とこだわりを見せるからこそ、生徒は「この先生は授業を大切にしている」と信頼したのです。

若かった松高先生も今は管理職。できる人は人に任せないで自分でやってしまうけれども、それでは人は育たない。彼は人に任せるのが上手です。人に任せ、人を育て、その代わり責任は自分がきっちり取る、それが管理職というもの。松高先生に贈るオヤジの言葉です。

※プロフィールは取材時（09年2月）のものです

SPECIAL ISSUE

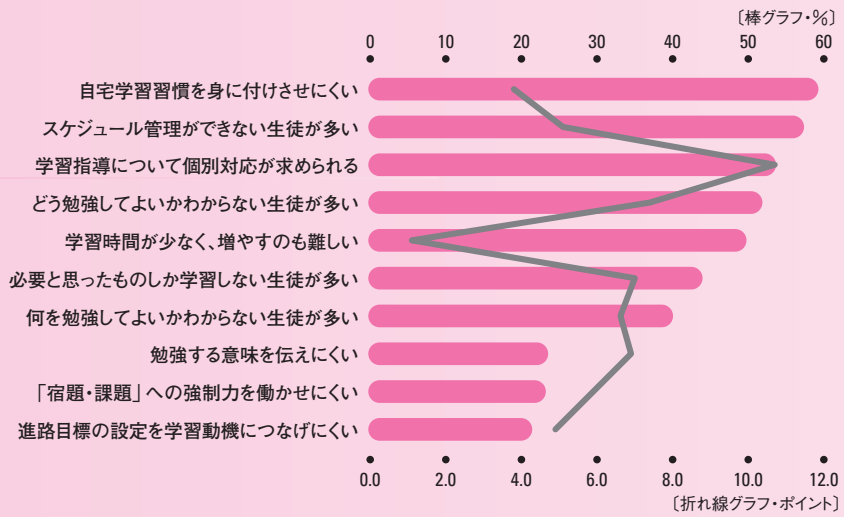
特集

中・高・大とつなげる「学び」と「指導」

中学校、高校、大学（社会）の学びの連続性を踏まえ、高校の3年間でどのように生徒を指導していけばよいのかを考える。

「自宅学習習慣が身に付かない」が最大の課題

高校教師へのアンケート「**生徒の状況や指導上の課題（学習面）**」



「自宅学習習慣の身に付けさせにくさ」を変わらぬ課題と挙げる先生方が多い。
その一方で、今後の課題としては
「個別対応が求められること」が一番高い肯定率になっている。

進研模試 2009年度「教科に関するアンケート」（教育環境変化）より〈回答数665件〉

グラフの見方

【棒グラフ】現状の肯定度（「とてもあてはまる」「あてはまる」の回答率の合計〈%〉）

【折れ線グラフ】変化の度合い（「今後の肯定度（%）」－「現状の肯定度（%）」の値〈ポイント〉）

質問形式について

（1）～（5）各項目について、先生のお考えを「これまで」「今後（の予想）」に分けてうかがった結果です。
それぞれ「5:とてもあてはまる／4:あてはまる／3:どちらでもない／2:あまりあてはまらない／1:全くあてはまらない」の5段階の中から選択いただいています。

1 中・高・大接続の課題

中・高の接続課題

◎主体的な学習態度が身に付かない
◎学区の撤廃・緩和（生徒の一極集中）
◎高校の再編が進まない（学校小規模化）

高・大の接続課題

◎大学入試の全体的な易化
◎推薦・AO入試拡大など、入試の多様化
◎大学で不適応を起こす学生が多い

2 連続性の観点で再定義する高校の学び

インタビュー 早稲田大大学院 **安彦忠彦** 教授

「自立」と「個性」

◎キャッチアップ型の社会から脱皮した今の日本の教育は、「自立」と「個性」を中学校、高校、大学と連続して育てていくことが必要。

いかに自立を促し、個性を伸ばすか

◎「観」の形成、すなわち、幅広い知識や経験が必要。そのため、新課程で共通の必履修科目が設定されたことは評価できる。
◎高校時代が自立の準備時期であり、個性を伸ばす時期。

	自立	個性
中学校	**基礎づくり** 国民としての基礎をつくる	**探る時期** 自分が何に向いているか、何をしたいかを探る
高校	**準備** 専門教育への準備と「観」の形成	**伸ばす時期** 自分に向いていること、したいことを伸ばす
大学	**準備** 視野の拡張による自己相対化と「観」の形成	**伸ばし深める時期** 専門的活動経験による個性の伸長・深化

3 高校現場が挑戦する取り組み

対談
山尾孝司 × 北澤正志
兵庫県立姫路西高校　岡山県立岡山朝日高校

生徒の実態

◎受け身の生徒が増加、主体性を養うことに苦労（**山尾**）
◎失敗を恐れる生徒が増えた（**北澤**）

教師一人ひとりがすべきこと

◎主体性を引き出すために「キャリア教育」が必要（**山尾**）
◎教師が専門性と指導力を磨くこと（**北澤**）

学校としてすべきこと

◎多忙を理由に「中途半端」に終わらせない（**山尾**）
◎自校の生徒の特徴をつかみ、重点を置くべき活動を見定める（**北澤**）
◎必要になるのは高校同士の連携（**山尾**）
◎中学校と高校が連携して生徒を育てていくという視点をもつ（**北澤**）

インタビュー

学びの連続性の中で高校に求められる「自立」の準備と「個性」の伸長

中学校から高校、そして高校から大学、社会と、連続した中で「高校の学び」を再定義することが、いま求められているのではないだろうか。高校3年間で必要な学びと指導を、早稲田大大学院・安彦忠彦教授にうかがった。

早稲田大大学院教職研究科教授　安彦忠彦　Abiko Tadahiko

「自立」と「個性」が確立できていない学生たち

中学校から高校、そして高校から大学という「学びの連続性」の中で、生徒をどのように育てていくべきなのか。それを考えるとき、私がキーワードとして挙げるのは「自立」と「個性」です。中学校から高校へと受け継いだ生徒を、大学を経て社会に送り出すときには、しっかりとした社会性（自立）と、専門性（個性）を身に付けさせておく必要があります。

ところが現状では、「自立」と「個性」を育てるための教育が、各校種で十分に行われているとはいえません。少なくとも大学入学段階では、ほとんどの学生は、社会性を発揮する上で不可欠となる「バランスの取れた知識と、その知識を活用して物事を考察し、主体的に判断や行動ができる力」が育まれていません。つまり、知識や思考の幅が、非常に狭くなっているのです。また専門性を身に付ける上で前提となる「何を勉強したくて、この大学・学部に入学したのか」という目的意識も希薄です。

こうした学生に対して、もし大学が何の手立ても講じなかったとしたら、私たちは「自立」と「個性」が確立できていない若者を、大量に社会に送り出してしまうことになるのです。

中学、高校、大学が果たすべき役割とは

このような状況になってしまったのは、やはりそれぞれの校種での責任が大きいと思います。中学校は「み

Abiko Tadahiko

あびこ・ただひこ　名古屋大教育学部教授、同教育学部附属中・高校校長、同大学院教育発達科学研究科長および教育学部長を経て、2002年から早稲田大教育学部教授。05年から中央教育審議会委員。専門は教育課程論。

んな高校に行くのだから、自分が何をしたいかについて考えるのは、高校に入学してからにしなさい」と生徒が自分の存在について模索する機会を先送りし、高校もまた「とりあえず今は大学合格に専念しなさい」と、受験学力を付けることを優先して、生徒が「自立」や「個性」を育むことを先送りする傾向もあるのではないでしょうか。

その一方で、今の大学教育を見ると、学生の「自立」と「個性」についての準備が、既に一定段階に達していることを前提としてカリキュラムを組んでいます。

かつて大学に教養課程があったころには、学生は専攻以外の学問に触れながら、幅広い視野や教養を身に付けていました。また教養課程は、さまざまな勉強をしながら自分が進むべき専門分野を見極める期間にもなっていました。

ところが現行の大学のカリキュラムは、入学直後からかなり専門性にシフトした構成となっています。「自立」と「個性」が未熟なまま入学してきた学生と、カリキュラムとの間に、ギャップが生じてしまっているわけです。

社会構造が複雑化すると共に、多くの識者が「今は自立が難しい時代だ」と言っています。だからこそ、生徒や学生の「自立」と「個性」を育むために、中学校、高校、大学が各自の役割をしっかり果たすことが、より一層大切になってきていると思います。

「自立」を準備し「個性」を伸ばすのが高校

私は「自立」については、中学校が「基礎づくりの時期」なのに対して、高校は「準備の時期」であり、また「個性」については、中学校が「探る時期」に対して、高校は「伸ばす時期」だと考えます。

まずは「自立」から述べましょう。中学校のカリキュラムは、国語、数学、英語といった普通科目によって構成されています。中学校は義務教育ですから、「国民として、自立して生きていけるようになるために、最低限これだけは身に付けてほしい」という基礎となる科目を中学校時代に学ぶわけです。

一方、高校教育も、普通科の場合は、普通科目の学習が中心となります。ただし中学校までとは、意味合いが異なります。中学校の普通科目が「国民としての基礎」を身に付けるものだとすれば、高校の普通科目は、専門教育を受けるための準備教

＊プロフィールは取材時（09年2月）のものです

育、すなわち「専門への基礎」の役割を果たしています。「専門教育を受ける準備段階として、これだけの幅と量の知識や思考力は、身に付けておいてほしい科目」として設定されているのが、高校の普通科目です。

2009年3月、文部科学省から発表された高校の新学習指導要領では、国語、数学、外国語で共通必履修科目が設けられることが打ち出されました。しかし私自身は、更に理科と地歴・公民も含めた6教科で、共通必履修科目を設けてもよかったと思っています。

生徒の実態が高校によって多様化し、一律の指導が難しくなっているということはよくわかります。けれども、「専門教育を受けるための準備教育として、どの高校でもこれだけはきちんと生徒に身に付けさせてほしい」というものがある。私はそう考えています。もちろん、その生徒が志望する大学の入試科目には、関係ない科目も含まれることになるでしょう。

「大学入試に合格することを目的とした教育」ではなくて、「専門教育の準備段階としての教育」であることを、私たちはより意識しなければならないと思うのです。

ちなみに、今回の高校の新課程では、全般的に教える内容の量が増えています。また中学校の新課程でも、現行課程では削除されていた学習内容が復活したり、上の学年で教えている内容が下の学年に降りるなど、学習内容の充実が図られています。

これにより中学校・高校段階で確かな「基礎基本」を身に付けた生徒が、大学へと進学してくるようになることが期待できます。

ただし、大学・大学院での教育・研究や、社会に出てから求められる能力を考えたとき、必要になるのは「基礎基本」だけではありません。新課程では「言語活動の充実」や「活用の重視」が掲げられていますが、これらの取り組みを通じて、どれだけ授業の中で生徒の「考える力」を高めることができるかが非常に重要になってくると思います。大学や社会で本当に求められるのは、未知の課題に直面したときに、持っている知識を活用して自分で考えをめぐらせながら、課題解決のための答えを導き出せる力だからです。

これまで各科目の授業では、知識の習得を強化するために応用問題に取り組ませるといった「習得のための活用」については行ってきました。しかし今後は、知識を習得したら、それを問題解決のために活用できる力を、授業の中で生徒に身に付けさせる必要が出てきます。

こうした授業は、一部の先生方を除いて、従来ほとんど取り組まれてきませんでした。そのため、最初は戸惑うことが多いでしょう。教師間、学校間、校種間を越えて、ノウハウを蓄積していくことが不可欠になると思います。

「観」の形成のために知識と経験の蓄積を

また、「自立」の準備期間である

図　学びの連続性の中での各校種の役割

	自立	個性
中学校	基礎づくり 国民としての基礎をつくる	探る時期 自分が何に向いているか、何をしたいかを探る
高校	準備 専門教育への準備と「観」の形成	伸ばす時期 自分に向いていること、したいことを伸ばす
大学	準備 視野の拡張による自己相対化と「観」の形成	伸ばし深める時期 専門的活動経験による個性の伸長・深化

*安彦教授のインタビューを基に編集部にて作成

高校時代には、「観」の形成を図っていくことが大切になります。「観」とは、人生観、人間観、社会観といったものです。「観」は豊かな知識と経験の中から育まれていきます。ところが今の学生を見ると、知識や経験の幅が乏しく、また、これまで受け身の姿勢で学んできたために、自分の力で「観」を形成していく力が弱い者が目立ちます。高校教育から大学教育にかけて、私たちには、しっかりとした「観」を身に付けた若者を社会に送り出す責任があります。

そのためにも、特に高校では、受験対策に特化した狭い教育ではなく、豊かで質の高い教養と経験を生徒に積ませることを意識してほしいと思います。また、「観」の形成のためには、単に知識を身に付けているだけではなく、「自分で考え判断する力」も不可欠です。新課程の総則には、各教科・科目の指導にあたって、基礎的な知識・技能の「活用」を図る学習を重視することが盛り込まれています。獲得した力を活用して考える力、判断する力の育成にも更に力を注いでいただければと思います。

「探る時期」があって「伸ばす時期」がある

一方の「個性」ですが、子どもは思春期になると、「自分には何が向いているのだろう。何がしたいのだろう」と模索し始めます。これが「探る時期」です。やがて自分に合った方向が見つかると、それを「伸ばす時期」へと進んでいきます。

そういう意味で、中学校の選択教科は、自分は何に向いているか「個性を探る」ために活用されるべきでした。したがって、一つひとつの科目の学習期間や内容は「短く、浅く」でよく、いろいろな科目を試しながら、自分に向いた分野を探らせることが大切でした。

ところが、高校と同じように通年履修の本格的な選択教科を導入したために、うまく機能しませんでした。あれこれと探らせる前に、いきなり生徒に選択させて伸ばそうとしてしまったのです。こうした運用面の失敗が原因で、中学校の新課程で選択教科の枠組みがなくなってしまうことは、私としては大変残念です。

中学校時代にしっかりと「探る経験」をさせていれば、高校で選択科目の中から自分に向いた科目を選ぶときも、あるいは大学や学部などの進路を定めるときも、比較的迷うことなくこれを決定することができます。高校としては、あとは選択した「個性」を伸ばしてあげればよい。

しかし現実には、「探る経験」が不十分なまま、高校に入学する生徒が少なくないと思います。だからこそ、高校には「探らせた上で、伸ばす」という二重の役割が期待されていると、私は思うのです。

重要性が増す高校段階のキャリア教育

そうした中で、生徒に「自分の個性を探らせ、伸ばす」ときには、キャリア教育が有効な手段の一つとして挙げられます。さまざまな職業人や大学院生などの先輩と出会い、話をする中から、「自分が何に向いているか」を探らせ、「その分野に進むためには、何が必要になるか」を見つけさせる。もちろん、途中で進路を変更してもよいでしょう。暫定的なものでよいから、自分で選ばせるという経験をさせることが大切だと思います。これが高校段階でしっかりできていれば、目的意識が希薄なまま、受け身の姿勢で大学に入学してくるようなことはなくなるはずです。

日本の若者は、海外と比べると、「自立」や「個性」の確立という点で、未熟な者が多いと感じます。日本は「先進国に追いつき追い越せ」というキャッチアップ型の社会から既に脱却しています。欧米の真似をすればよいのではなく、自分の頭で考え、豊かな社会性と高度な専門性で未来を切り開かなくてはならない。そのためにも、「自立」と「個性」を育む教育がより重要になると思います。

調査分析

中・高・大の接続の課題

データで検証する「中学→高校」「高校→大学・社会」の現状

中・高・大の接続部分で、今、どのような環境変化が起きているのだろうか。各種のデータを通して、その接続の現状を見る。

中学→高校　接続の課題

少子化などを背景に多様化が進む高校

表にまとめた通り、生徒数の減少などを背景にした一連の高校改革や入試改革、中学校の評価方法の変更など、高校を取り巻く制度的な環境の変化は著しい。これらの変化は、中学生・高校生の意識や学習態度にさまざまな影響を与えている。

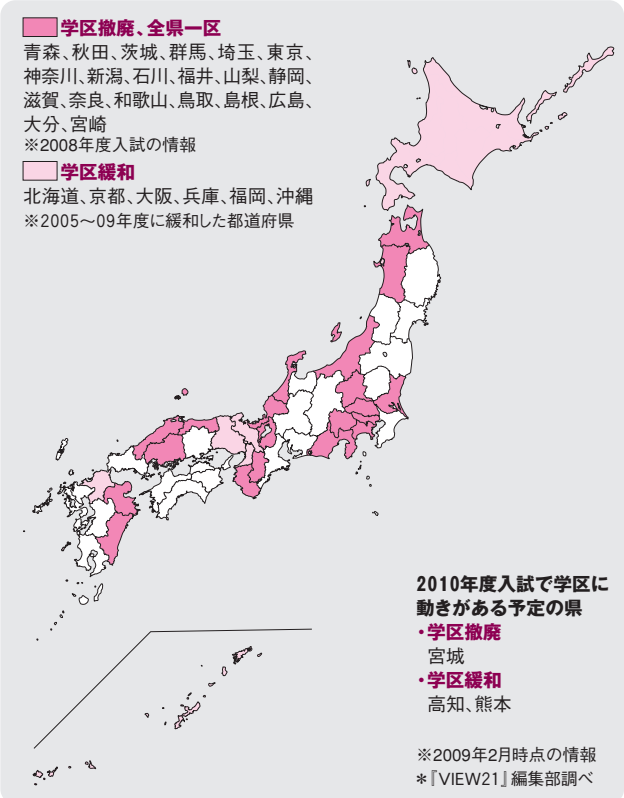
図2は、小・中・高校生の平日の家庭学習時間の推移を示したものだ。1日30分以内しか学習しない（ほとんどしない生徒も含む）高校生は約4割おり、その割合は年々増えている。しかも、小・中学生よりも高校

表　中高接続にかかわる主な環境変化

変化の要因	変化の様子	影響
高校の多様化	中高一貫校や総合学科、全日制の単位制増加（1990年代以降純増）	生徒の希望と学校での学習内容の不一致 → 生徒の意欲に影響
高校の学区	学区撤廃、緩和の方向	伝統校や市内の交通の便が良い高校に人気が集まる傾向。高校間の格差が広がる → 生徒募集に影響
少子化	生徒の減少幅に対して、学校数は微減。その結果、学校規模が縮小	高校での選択科目数や部活動の種類など選択肢が狭まる。1人の教師が複数科目や専門外の科目を教えなければならないケースが発生 → 高校の指導に影響
中学校での評価の方法	相対評価から絶対評価へ（現行課程より変更）	中学校ごとの評価基準が異なり、高校入学時の学力把握がしにくくなる → 高校の指導に影響

＊『VIEW21』編集部調べ

図1　高校の学区の撤廃・緩和の現状



生の方が、家庭学習時間が少ないという現実が浮かび上がってきた。

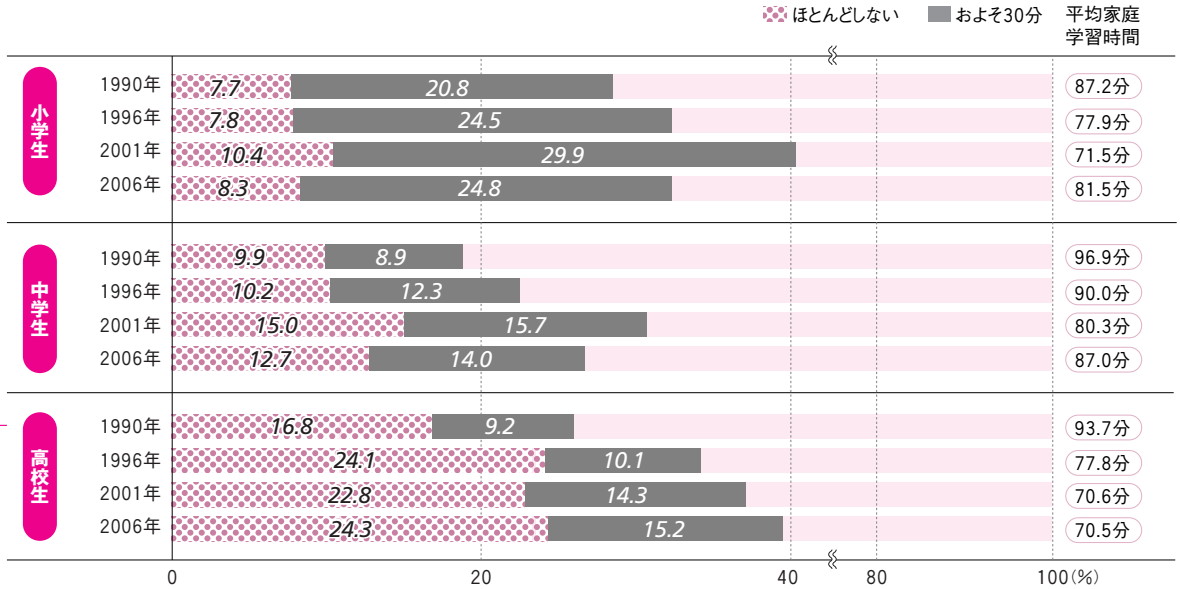
主体的な学習に向かいにくい高校生

図3は小・中・高校生の通塾率を示した。中学生の通塾率は4割強でほぼ横ばいなのに対し、高校生の通塾率は増加傾向にある。中学校段階での学習スタイルが高校に入学しても変わらず、受け身の学習が増加しつつある高校生の姿が見えてくる。

また、「日本は、努力すればむくわれる社会だ」「いい大学を卒業すると将来、幸せになれる」と思う子どもは、学校段階が進むにつれ減少し、「日本は、競争が激しい社会だ」「お金がたくさんあると幸せになれる」は増加する傾向が見られた（図4）。

高校教育の多様化が進み、生徒の進路意識や学習意識が変化する中で、生徒の進路観・学習観を育てる普遍的な指導とのバランスが、高校に求められている。

図2　平日の家庭学習時間の推移（学習塾、予備校、家庭教師の時間を含む）



※家庭学習時間の平均は「ほとんどしない」を0分、「3時間30分」を210分のように置き換えて算出

図4　小学生、中学生、高校生の意識変化

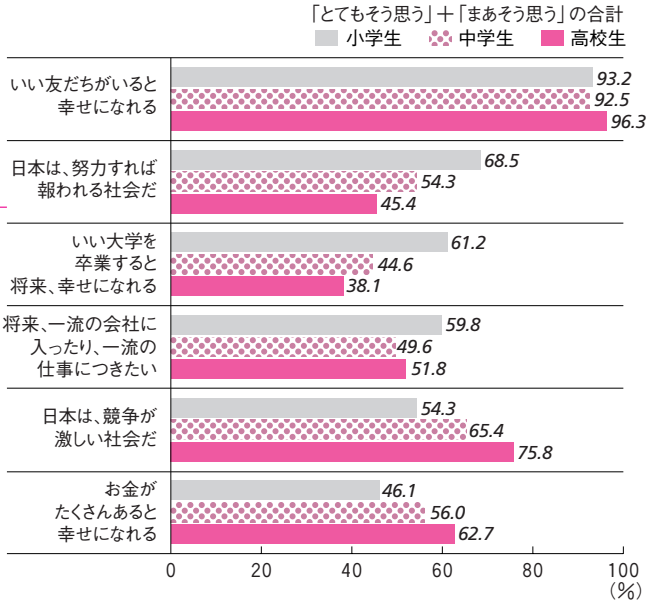
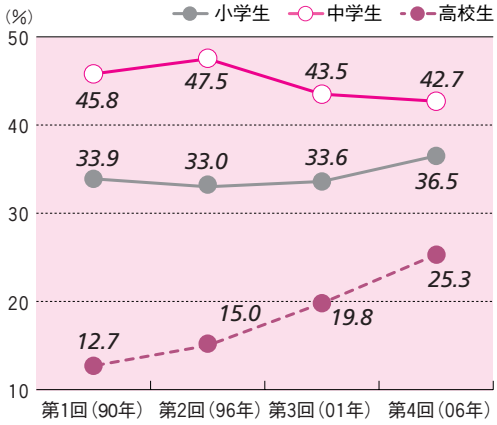


図3　学習塾や予備校の利用率



※放課後や休日（第1回～第3回は日曜日）の学習塾や予備校の利用率。ただし、習字などの塾は除き、自習教室は含む

図2～4
出典／Benesse教育研究開発センター「第4回学習基本調査」（2007年）
・サンプル数
小学生第1回2,578名、第2回2,665名、第3回2,402名、第4回2,726名
中学生第1回2,544名、第2回2,755名、第3回2,503名、第4回2,371名
高校生第1回2,005名、第2回2,615名、第3回3,808名、第4回4,464名

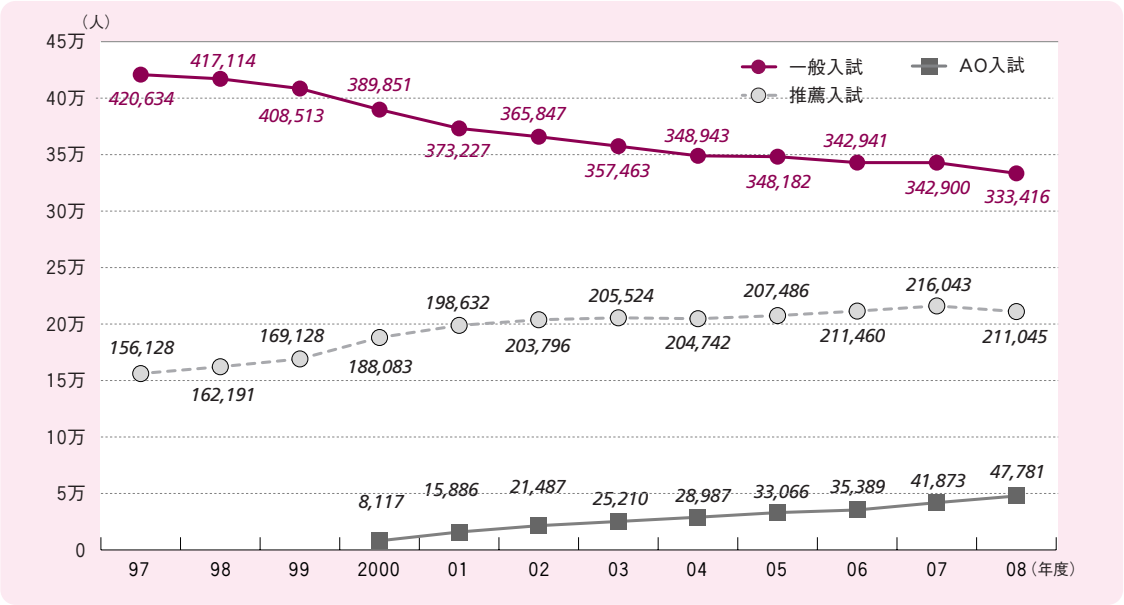
大学入試の多様化と大学生の質的変化

高校から大学・社会との接続において、まず注目すべきは大学入試の多様化だ。**図1**は大学入試形態別の入学者数の推移を示したグラフだ。一般入試を経由した入学者は年々減少する一方、推薦入試、AO入試を経由した入学者は増加傾向にある。推薦・AO入試を目指す生徒の増加で、高校生の進路決定の時期が多様化し、指導内容も複雑化している。

一方、大学入試が学力保障の装置として機能しにくくなっている。**図2**を見ると、一般入試における偏差値が45未満の私立大の推薦入試において、実質倍率が1.5倍未満という学部がほとんどであり、「大学全入」が現実化しつつある。

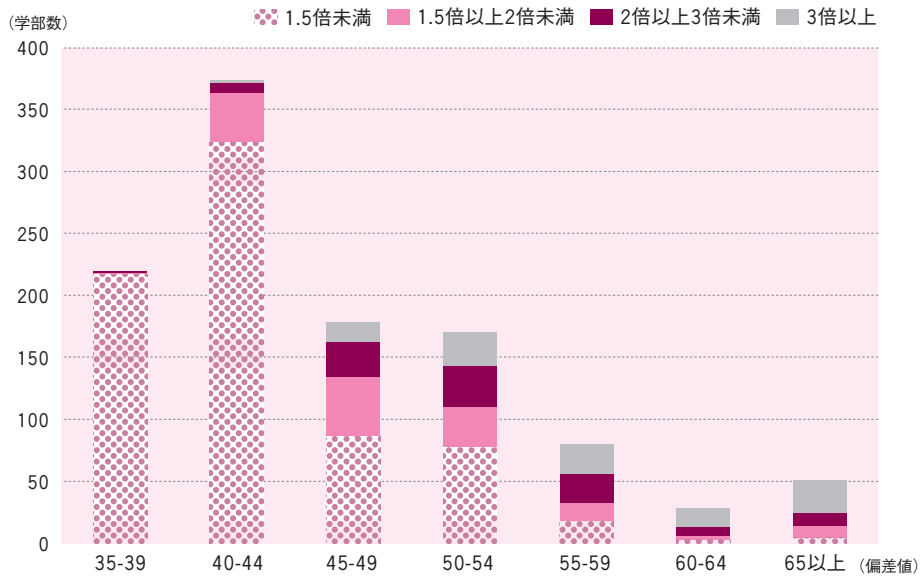
大学入試環境の変化は、大学生と大学とのマッチングにも影響を与えている。**図3**を見ると、3割を超える学生が、自分の所属する大学の中で学部・学科・コースを変更したいと感じていることがわかる。「他の大学に入り直したい」と感じたこと

図1　国公私立大学の入試形態別入学者数の推移



＊文部科学省「国公私立大学・短期大学入学者選抜実施状況」を基に編集部で作成

図2　私立大推薦入試の実質倍率別学部数（2008年度入試難易度別）



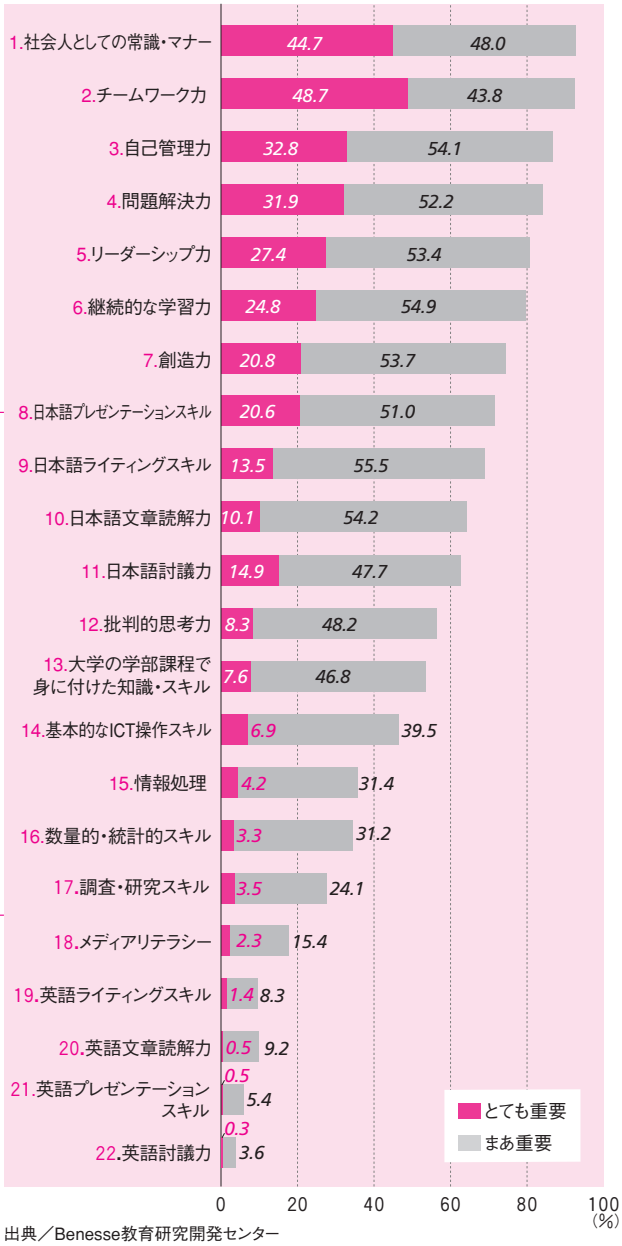
※入試難易度は、07年度3年11月ベネッセ・駿台マーク模試の一般入試におけるB判定値を使用
＊ベネッセコーポレーション調べ

がある学生は約半数に及ぶ。特に、入試難易度が「45以上50未満」「45未満」の大学でその割合が高い。

大学での学びも、その成立が次第に困難になっているようだ。大学教員の約6割が、新入生の学力が低下していると回答。中でも、「基礎的能力」の低下に関しては、7割近くの教員が指摘した（**図4**）。学力低下の具体的な原因には、「主体性の欠如」が1位に挙げられ、学生の学習実態の変化が大学教育にも影響を与えていることがわかる。

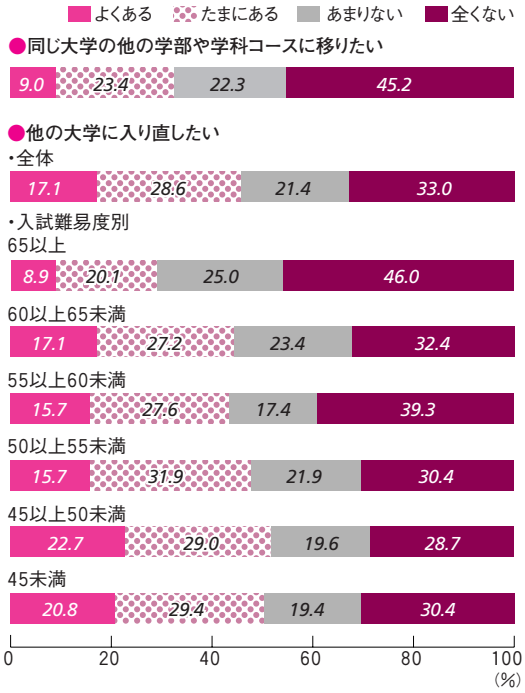
中学・高校・大学と学んだ彼らを、社会はどのように評価しているのか。**図5**は、企業が新規大卒採用の要件として重視するスキルを尋ねた結果だ。最も数値が高かったのは、「社会人としての常識・マナー」で、次いで「チームワーク力」「自己管理力」「問題解決力」「リーダーシップ力」などが続いた。英語力やICTスキルといったものよりも、「自分」や「社会」をそれぞれに定義する「観」の確立を社会も求めているといえるのではないか。

図5　企業が大卒者の採用時に重視するスキル



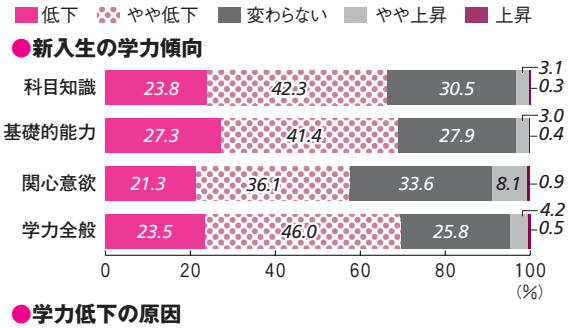
出典／Benesse教育研究開発センター
「社員採用時の学力評価に関する調査（企業対象）」（2008年9月）
※文部科学省委託『大学卒業程度の学力を認定する仕組みに対する調査研究』（2008年12月）所収

図3　大学での適応度



＊入試難易度は、進研模試の入試難易度ランキング（08年度作成）による
出典／Benesse教育研究開発センター
「大学生の学習・生活実態調査報告書」（2009年）

図4　大学生の学力低下に関する大学教員の意識



●学力低下の原因

1位 主体性の欠如

2位 論理的思考力の欠如

3位 日本語の基礎学力の低さ

選択項目　①主体性　②論理的思考　③基礎科目の理解　④外国語　⑤大学での学習に必要な基礎科目の履修　⑥日本語　⑦学習方法　⑧他人の考えの理解　⑨数量分析

出典／日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究B
「大学生の学習意欲と学力低下に関する実証的研究」（2006年）

対談

高校3年間で、いかに質の高い学びの場と指導を提供するか

受け身の生徒が増える一方で、大学や社会からは、主体的に行動できる人材の養成が高校現場に求められている。高校は3年間という限られた時間の中で、何に力を注ぎ、どのように生徒を育て、大学・社会に送り出していけば良いのだろうか。進路指導を担当する2人の先生に語り合っていただいた。

受け身で失敗を恐れる現代の高校生

北澤　ここ数年の高校生の様子を見て私が感じているのは、失敗を恐れる生徒が増えてきたということです。

端的に言えば受験がそうです。かつては、難関大に果敢に挑戦し、自分の力を信じて最後まで頑張り通せる生徒がたくさんいました。ところが今は、センター試験の成績がちょっとでも思わしくないと、すぐに気持ちがぐらつく。教師がぎりぎりまで生徒に対して精神的なサポートをすることで、ようやくゴールにたどり着くケースが増えてきています。

山尾　受け身の生徒も目立つようになりましたね。

本校では昨年末に1、2年生から希望者を募って、ある地元の研究開発系の企業に職場訪問をしました。地域の伝統校の生徒ということで、特別に最先端の研究施設を見学させてもらったり、研究者としての気概や苦労といったお話をうかがったりと、その企業には貴重な機会をいただきました。

ところが、見学が済んでいざ研究者の方への質問という段になったときに、生徒の側から全く質問が出てこなかったんです。先方の管理職の方が、その様子に業を煮やして「あ

兵庫県立姫路西高校
進路指導部長
山尾孝司
やまお・こうじ

なたたちは学校の先生が与えてくれた枠組みの中で、受け身的に行動しているだけじゃないか。なぜ興味を持ったこと、疑問に思ったことを、自分たちから積極的に表現できないのか」と生徒たちに訴えかけられたほどでした。

このように受け身の生徒や、失敗を恐れる生徒が、かなりの割合で本校にも入学してくる状況になってきました。そして我々も、生徒の主体性を養うことに非常に苦労しているわけです。

環境の変化に苦労する中学校、高校の学校現場

山尾　ただ、だからといって私は、中学校の指導の在り方を責めるつもりはありません。実際、中学校の先生方は、精一杯努力されています。特に兵庫県では「トライやる・ウィーク」といって、中学生の職場体験学習を全県的に展開しています。こうした活動の準備にかかる先生方の負荷は相当なものです。高校から一方的に中学校現場に「もっと学びに向かう意欲や主体性を身に付けさせてから、生徒を高校に送り出してほしい」と要求するのは酷な気がします。

北澤　同感ですね。高校に入学してくる生徒の気質が変化した要因としては、中学校の責任というよりは、社会環境や家庭環境の変化が大きいと思います。

特に苦労しているのは、いわゆる普通の公立中学校の先生方ですよね。ただでさえ主体的に学び、活動する生徒の層が薄くなってきている上に、近年では私立中学校に加えて公立にも中高一貫校が増えたために、本来ならば各中学校でリーダー層になる生徒たちが、私立校や中高一貫校に進学するケースが多くなっています。従来であればリーダー層の生徒たちを核にした学級づくり、学校づくりができたのに、それが困難になっています。

そして、公立中学校に通う生徒層が、今度は公立高校に入学してくるわけです。そう考えると、公立中学校と公立高校は同じ困難さを共有しているといえます。

ですから、中学校と高校がお互いに連携しながら生徒を育てていくという視点が、今まで以上に重要になってきていると思います。双方とも忙しいので、無理のないところから始める必要があります。本校でも今、ある中学校との間で定期的に協議し、連携の可能性を探っているところです。

教科指導とキャリア教育で生徒の知的好奇心を刺激

山尾　生徒の主体性を引き出すために、本校が今後力を注ごうと考えているのがキャリア教育です。年末に行った職場訪問もその一環でしたし、昨年は1、2年生の希望者を募り「東大探訪」や「京大探訪」も行いました。キャンパス内を見学するだけではなく、本校OBの教授・大学生と生徒との交流の場も設けました。先生方や学生たちに「どういった志を抱いて、どのような学問を研究しているのか」について、失敗談や苦労話を交えて、できるだけ現実のままを話してもらったんです。

ロールモデルとなり得る先輩との出会いは、生徒が大学での将来の自分の姿をイメージする上で、大きな経験となりました。「東大探訪」に参加するような生徒は、もともと大学進学に対する意識が高い層なのですが、担任に聞くと「先輩との出会いを契機に、これまで以上に学びに対する意欲が高まっている」と言います。

岡山県立岡山朝日高校
進路指導課長
北澤正志
きたざわ・まさし

＊プロフィールは取材時（09年2月）のものです

思考力、リテラシー、コミュニケーション能力……教科指導の中でこそ養いたい

兵庫県立姫路西高校　山尾孝司

Yamao Kouji

年末の職場訪問のときのように、こちらが刺激を与えたからといって常に生徒が応えてくれるとは限りません。しかし、できる限り生徒を学校の外の世界に連れ出し、刺激を与え続けていきたいと思います。

北澤　私は知的な面で生徒に刺激を与えていくには、やはり教師が専門性と指導力を磨き、教科指導で生徒と勝負していくことが一番だと思うのです。先日、本校のある年配の教師が「自分が高校生のころは、職員室に入ると、教師の机に専門書がずらりと並んでいたものだ。自分はそれに刺激を受けて、学問に対する憧憬を深めた」と話していました。確かに、今の教師に足りないのは、まさにそういう知的なあこがれに通じる部分ではないでしょうか。

私が担当する国語の授業では、生徒が取り組みやすい教材を選んでいます。しかし、内容はできる限り深いところまで降りていくものを選ぶよう心がけています。また、効果的な発問によって生徒との対話を深めることができれば、それを聞いている生徒の知的好奇心も刺激できると考えています。

多忙さで活動が中途半端にならないように

北澤　ただ、いくら「教科指導力で勝負」といっても、多忙化と共に教材研究や教科指導の前準備にあてる時間を確保するのが、年々難しくなっています。一人の教師としてこれはとても悩ましいことです。

山尾　そう、問題はそこなんですよ。私も高校の教師に一番求められるのは、教科指導力だと考えています。いわゆる「学士力」として、いま大学現場で求められている論理的思考力や問題解決力、数量スキルや情報リテラシー、さらにコミュニケーション能力といった力は、教科指導の中でこそ養わなければいけないと思います。

ところが今の教師は一方で、キャリア教育にも本腰を入れなくてはいけないし、総合的な学習の時間にも取り組まなくてはいけません。土曜講座等の課外の準備もあります。それらの仕事が学校で終わらなければ、家に持ち帰って作業をするわけですが、それでも足りないのが実情です。そうなると、最後は教材研究にかける時間を犠牲にするしかありません。

私自身、一番怖いのは、すべてが中途半端になってしまうことです。キャリア教育も、やるなら徹底してやるべきです。大学や企業、研究所に足を運び、学生や職業人、研究者と直に言葉を交わす機会があってこそ、生徒の視野は未来へと見開かれます。バスツアーで大学巡りをして終わりとか、受験雑誌等で職業調べをして終わりというのでは、身につ

専門性と指導力を磨き、知的な刺激を与えること――それが高校教師の役割

岡山県立岡山朝日高校 北澤正志
Kitazawa Masashi

くものや気づきは少ないでしょう。

日々の授業にも同じことが言えると思います。教師が教材研究を怠ったために質の高い授業ができなければ、生徒の知的好奇心をかきたてるのは不可能です。

教師に抱えきれないほどの仕事が降りかかる中で、時間的な制約のために、さまざまな活動がうわべだけのものになってしまうことを私は危惧しています。もしそのようなことになってしまったら、そもそも何のために自分たちはそうした活動をしているのか、教師も生徒にも意義がつかめないものになってしまいます。

高校同士の連携を更に活発に

北澤　先日、東京大の合格者数が全国でも有数の、ある公立高校を訪ねました。その高校では教師が教材研究に取り組む時間をしっかり確保していたんです。授業以外の活動にあれもこれもと手をつけずに、「本校は教科指導力で生徒の知的好奇心を伸ばす」ということに特化しているのだと感じました。一方で私は先日、ある会で進路多様校の発表を聞きましたが、その高校では体験学習を通じて、生徒の学びへの意欲を高めることに成功していました。

限られた人員と時間の中で、すべての活動に対して十分に力を注ごうとしても、どこかで限界に突き当たります。二つの対照的な高校を見て感じたのは、自校の生徒の特徴をつかんだ上で、何に教育活動の重点を置き、どういう形で学びへの主体性を高めていくのかを見定めることが大切だということです。

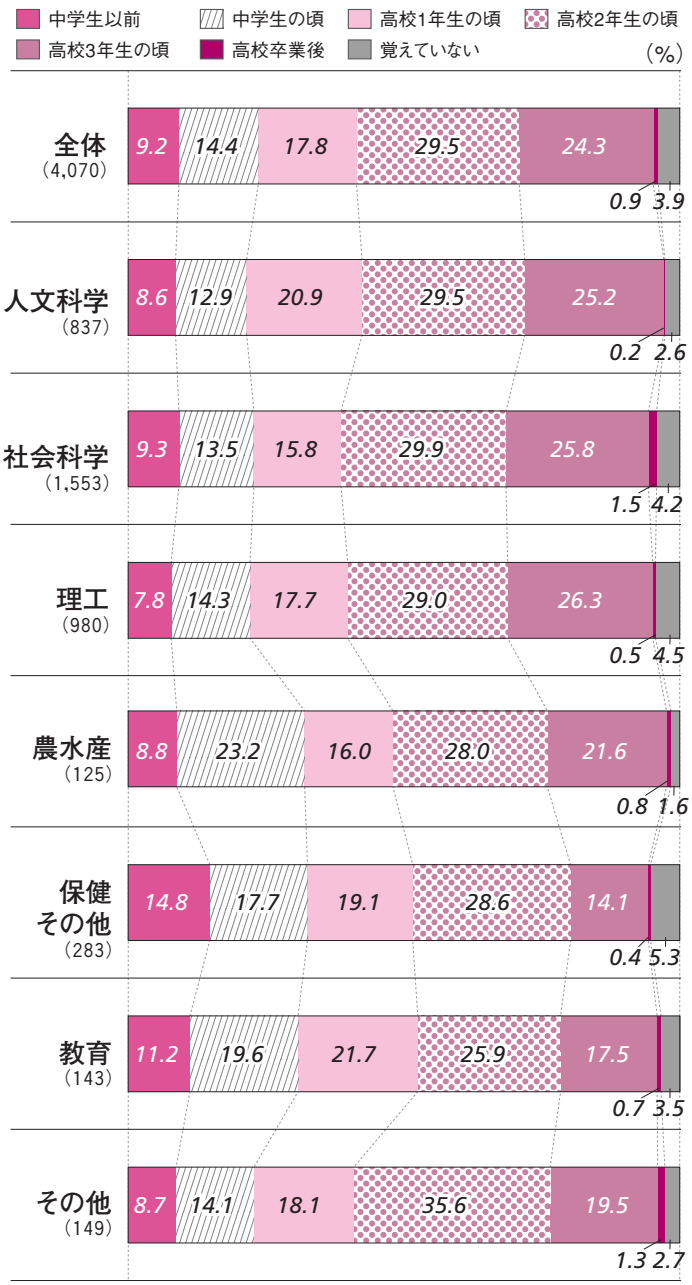
山尾　そこで必要になるのは、高校同士の連携ですね。他校と情報交換ができれば、自校の立ち位置を相対化できるし、やるべきことも見えてきます。ところが今は、孤立している高校が多いように思います。大学入学後はもちろん、社会に出たあともしっかりと伸びる生徒を育てるには、私たち教師は自分たちの高校は何をするべきかをさらに考えていかなければなりません。そのために、共通の問題を抱える高校同士での情報交換を、もっと活発にしていくべきでしょう。

混迷する時代にあって、どの高校の組織や取り組みも、脆弱な足場に立っているのではありませんか。今こそ我々は胸襟を開いて語り合うべきだと考えます。

約24%の学生が中学時代までに大学進学を意識

Benesse教育研究開発センター「大学生の学習・生活実態調査報告書」より

図　大学進学を意識し始めた時期（学部系統別）



出典◎「大学生の学習・生活実態調査報告書」／調査時期◎2008年10月／調査方法◎インターネット調査／調査対象◎18～24歳の大学1～4年生（ただし、留学生、社会人経験者を除く）／有効回答数◎4,070名　※（　）内はサンプル数

中学時代の進路学習歴の把握がより一層大切に

図は、大学1～4年生に大学進学を意識し始めた時期を尋ねた結果だ。「高校2年生の頃」が最も多く、次いで「高校3年生の頃」「高校1年生の頃」が続く。

注目は、「中学生以前」「中学生の頃」に大学進学を意識し始めた学生が、合わせて23.6%いたことだ。高校入学時点で4、5人に1人の生徒が大学進学を意識していることになる。この結果を見た高校教師からは、「中学時代までに進路を考えている生徒が予想以上に多い。高校での進路学習が中学校の『総合的な学習の時間』と重複し、物足りなく感じている生徒もいるのではないか」という声があった。

事実、中学校ではキャリア教育に力を入れている。特に、文部科学省は「キャリア・スタート・ウィーク」として5日間以上の職場体験を推奨している。国立教育政策研究所の調査では、公立中学校での職場体験の実施率（2007年度）は95.8%だ。ただ、活動内容や日数はさまざまで、同じ学区内でも中学校が違えば体験内容は一人ひとり異なるといってよい。

学部系統別に見ると、「教育」「保健その他（医・歯・薬学部などを含む）」では「中学生以前」から「高校1年生の頃」までに5割以上が大学進学を意識し始めていた。この2つの学部系統は希望する職業と具体的な学部が結び付けやすいこともあり、大学進学への意識につながっていると考えられる。

「入学時に大学進学を意識している生徒は意欲が高く、ほかの生徒を刺激し、学年全体を牽引する存在にもなる」という高校現場の声も多い。一方、「職業観が凝り固まっていたり、保護者らの影響を受けていたりする場合には、気を付ける必要がある」という意見もある。つまり、生徒の進路意識がどのような経緯で形成されたものなのか、どの程度検討したものなのかを見極める必要がある。公立中学校のキャリア教育も多様となった今、高校入学時に生徒一人ひとりと面談をするなどして、中学校までの進路学習歴や進路意識を把握し、教師間で共有することが重要だ。

調査の詳しい結果はBenesse教育研究開発センターのウエブサイトでご覧ください
ベネッセ　研究　で　検索
http://benesse.jp/berd/

栃木県立 **栃木高校**

進路検討会

「教師同士が必要に応じて声をかけ合う中で、『生徒の進路実現に向けて力を合わせよう』という意識がより強くなりました」

▶▶▶ P.20

指導変革の軌跡

そのとき教師は、そして生徒はどう変わったか

福岡県公立 **古賀竟成館高校**（きょうせいかん）

進路意識向上

「生徒のためにすべきことに取り組んでほしいと先生方に何度も訴えました」

▶▶▶ P.28

東京都・私立 **実践女子学園中学校高校**

キャリア教育・感性表現教育

「本人が満足できる社会参加のためには、高校の時点で25年後の自分をイメージさせることが大切」

▶▶▶ P.24

栃木県立
栃木高校

進路検討会

会議の実質化で担任支援と指導力向上を両立

◎2009年に創立113年目を迎えた伝統校。「独立自尊　和親敬愛　進取創造　質実剛健」を校訓として、社会の動向に正しく対処でき、将来有為な人材の育成を目指す。授業中心の教育の徹底、個人面談・保護者面談の重視を目標として掲げる。部活動も奨励し、水泳部、陸上部、弓道部などが関東大会に出場。

設立
1896（明治29）年

形態
全日制／普通科／男子校

生徒数
1学年約240名

08年度進路実績
国公立大には北海道大、東北大、筑波大、群馬大、千葉大、東京大、東京工業大、一橋大、横浜国立大、新潟大、名古屋大、京都大、首都大学東京など159名が合格。私立大には、青山学院大、慶應義塾大、上智大、中央大、東京理科大、明治大、立教大、早稲田大など延べ484名が合格。

住所
〒328-0016　栃木県栃木市入舟町12-4

電話
0282-22-2595

Web Site
http://www.tochigi-edu.ed.jp/tochigi/

変革のステップ

背景
◎教師の多忙感を払拭し、生徒一人ひとりと向き合う時間を確保したい
STEP 1

実践
◎学校独自の大学・学部難易度表の作成方法をスリム化し、事前会議を撤廃する
STEP 2

成果
◎時間確保だけでなく、教師間の連携が密になり、ノウハウが伝承しやすくなる
STEP 3

担任支援を目的として伝統の取り組みにメス

栃木県を代表する進学校として、100年以上の歴史を有する栃木高校。徹底した授業中心主義、手厚い進学指導で高い進学実績を上げてきた。実績を支える原動力の一つは、3年生の7月と12月に実施される進路指導委員会だ。3学年団と進路指導部が、生徒一人ひとりの進路志望について話し合う戦略会議である。「いつから始めたかわからない」と、進路指導部長の若杉俊明先生が語るほど伝統ある取り組みだ。

この「伝統」に改革のメスを入れたのは5年前。パソコンによる新たな合格可能性判定・検索システムを開発し、会議で進学先の検討にかけていた時間を簡略化。また、議論を実りあるものにするため、会議前に進路指導部と担任が事前に情報共有と意見の「すり合わせ」を導入するなどの改革を進めた。前進路指導部副部長（現1学年主任）の渡辺佐知夫先生は、当時を振り返り、改革のねらいを次のように述べる。

「本校の進路指導部は担任団をリードする性格が強く、それが力強い進路指導を実現する原動力となってきました。一連の改革のねらいは、そうした進路指導部の活力を生かしつつ、システム化し、情報提供を充実させること。それにより、担任支援の側面を強く打ち出していくことにありました」

その結果、教師の生徒理解の深化と進路指導ノウハウの充実、生徒の学習意欲の向上などの成果をもたらしたことは、本誌2005年2月号で取り上げた（注）。

しかし、この改革の過程でそれまで見過ごされてきた課題が新たに浮かび上がった。3学年担任と進路指導部員の多忙感の問題だ。年2回の進路指導委員会は、1、2学期の期末考査の時期に開く。生徒の質問が集中する時期だけに、「生徒と向き合う時間を少しでも多く確保したい」と多くの教師が感じるようになっていた。

栃木県立栃木高校校長
稲葉 実 Inaba Minoru
教職歴31年。同校に赴任して1年目。「進学指導を支えるのは授業。そこにすべてが詰まっている」

栃木県立栃木高校
若杉俊明 Wakasugi Toshiaki
教職歴27年。同校に赴任して6年目。進路指導部長。「モットーは、『決して冷めない』『仕事をこなしにかからない』」

栃木県立栃木高校
渡辺佐知夫 Watanabe Sachio
教職歴24年。同校に赴任して12年目。1学年主任。「生徒はみな光るものを持っている。それを自分で見つけてほしい」

栃木県立栃木高校
殿岡宏之 Tonooka Hiroyuki
教職歴23年。同校に赴任して6年目。進路指導部副部長。「何にでも積極的に挑戦する生徒を育てたい」

大学難易度表の作成を簡略化し、「すり合わせ」を撤廃する

従来、進路指導委員会は次の手順で行われてきた（図1）。進路指導委員会の本会議に先立ち、進路指導部が1週間程度かけて、校内模試や過去の入試結果などに基づく学校独自の大学難易度表を作成。それを基に進路指導部、3年担任団がそれぞれ2日間をかけて、生徒一人ひとりの志望校を詳細に検討する。結果は、各担任と進路指導部の各クラス担当（同校では3年生の各クラスに専属の進路指導部員が1～2人つき、担任と二人三脚で受験を乗り切る体制）が、本会議の前日、前々日に方向性の「すり合わせ」を行い、進路指導部、担任団、主要教科の担当者、管理職による本会議に臨む。

教師がまず切り込んだのは、校内偏差値による大学難易度表の作成方法だ。同校では、長年、過去の入試結果や受験科目の動向を踏まえ、校内模試の校内偏差値による独自の大学・学部・学科の難易度表を作成し、合格可能性を判定している。難易度表には、複数の外部の大学判定などを加味していたが、作業の効率化のため基準を一本化し、情報担当者の負担軽減を図った。

更に、時間を取っていた「すり合わせ」をやめ、本会議の進め方も変えた。改変前は、1日目に担任、進路指導部員、管理職が、約150人の生徒について1人ずつ検討。2日目は、ほかの生徒分を文系・理系に分けて綿密に検討していた。改変後は、1日目の途中から文理に分かれ、ほぼ2日をかけて詳細に検討することにした。事前会議や「すり合わせ」を省いた分、本会議における生徒一人ひとりの検討にかける時間を十分に確保しようとしたのだ。

図1 進路指導委員会の改変前と後

改変前		改変後	
進路指導部	担任団	進路指導部	担任団
難易度表作成のデータ集計（1～1.5週間）		難易度表作成のデータ集計（1週間）	
▼	▼	▼	▼
難易度表作成会議（2～3日間）		難易度表作成会議（2～3日間）	
▼	▼	▼	▼
すり合わせ前の事前会議（1～2日間）	すり合わせ前の事前会議（1～2日間）	担任団の要望に基づく進路指導部からの情報提供 例・○○の資格が取得できる大学一覧 ・新たに難易度表の設定の必要が生じた大学資料の提示	
▼	▼	▼	▼
進路指導部のクラス担当と担任による「すり合わせ」（各々1～2日間）			
▼ 本会議（1日目） ▼		▼ 本会議（1日目） ▼	
約150人の生徒について全参加者で検討（約6時間）		約20人の生徒について全参加者で検討後、文理に分かれて検討（約7時間）	
▼ 本会議（2日目） ▼		▼ 本会議（2日目） ▼	
約150人以外の生徒について、文理に分かれて検討（約5時間）		1日目に引き続き文理に分かれて検討（約6～8時間）	
▼	▼	▼	▼
	二者、三者懇談		二者、三者懇談

注　バックナンバーはBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。
http://benesse.jp/berd/　→HOME＞情報誌ライブラリ（高校向け）

＊プロフィールは取材時（09年2月）のものです

独自の大学難易度検索システムで業務を簡略化

会議のスリム化によって、質問を受けたり面談を行ったりと、生徒と向き合う時間をより多く確保できるようになった。ただ、本会議までの間、生徒の志望校についての情報収集や分析が全くなされなくなったわけではない。

同校には、6年前に進路指導部の山下拡男先生が作成した通称「検索くん」と呼ばれる大学難易度検索システムがある。大学名や難易度を入力するだけで、合格判定や合格圏内にある大学名が検索できる上、印刷すれば、そのまま面談の資料にもなる（**図2**）。

「『すり合わせ』がなくなった期間に、担任も進路指導部員もこのシステムを使って、それぞれ自主的に各生徒の志望について検討しています。『すり合わせ』だと、どうしても時間を決めて取り組まなければなりませんが、パソコンを使っての検索であれば、各教師が時間の空いているときに自主的に調べられます。担任とクラス担当が声をかけ合いながら、必要なときに必要なことについて効率的に話し合えるようになりました」（若杉先生）

これまでも、進路指導委員会は担任や進路指導部員にとって学習の機会となっていた。それが、「すり合わせ」の撤廃によって本会議の位置付けが相対的に高まり、本会議でベテラン教師の生の声を聞いたり、生徒の進路を絞り込むプロセスそのものに触れたりする機会が増え、一層、実践的なノウハウが得られるようになったという。

「以前は、『一度、すり合わせをしているのだから、あまり時間をかけないようにしよう』『ここでは教科の学習法にまで踏み込むのはやめよう』など、会議に参加する先生も遠慮することがありました。今では、生徒一人ひとりにかけられる時間が増えた分、より多角的な視点で生徒の現状や合格可能性について話し合えるようになりました。『この生徒は、ずっと医学部に行きたいと言っていたが、現状ではかなり厳し

図2　三者懇談資料（例）

三者懇談用資料は、7月の第1回進路指導委員会を基に担任が作成する。数値は校内偏差値を記入。メモ欄には、生徒の志望、学習状況、学習への意欲などを基に生徒へのアドバイスを会議で検討し、導かれた文言を記入する。進路指導部と担任団の試行錯誤の上、現在の形式になった。

い。もし、医療系というのであれば、臨床検査技師や理学・作業療法士を目指す、あるいは工学部で医療機器を開発する道もある』というように、一人の生徒に対して多くの先生がさまざまな可能性を指摘してくれる。同じような討議がされていたとしても、『すり合わせ』ではそれが表に出てこないことがありました。公開の場で意見を述べ合うことが、若手の先生にとって、幅広い視野を養う絶好の機会になっているのです」（渡辺先生）

進路指導委員会の数日後には、三者懇談が控えている。委員会で交わされた内容は、懇談の際、担任が生徒や保護者に伝える言葉にもなる。進路指導部副部長の殿岡宏之先生は、それが学校への信頼感につながると話す。

「例えば、『英語の得点が低いからもう少し頑張らないと』などと言っても、それはデータを見ればすぐにわかりますし、生徒は具体的に何を頑張ればよいかわかりません。しかし、本会議に出席した各教科の先生から具体的なアドバイスを得ていれば、教科担当でなくても、『数学のこの部分が弱いから、もう一度教科書にしっかり戻れ』や『この参考書をこのように使うとよい』など、具体的な勉強方法をアドバイスできます。教科担当が既にアドバイスをしていることもありますが、担任も同じことを言ってくれたということが安心感につながり、信頼感が高まるのです」

「築いてきた教師の顔がちらついた」葛藤と重圧との戦い

一連の改革に対する教師の評価は高い。多くの教師が「変えてよかった」「担任支援の面が色濃く出ている」と前向きな感想を述べている。取り組みの副産物として、担任と進路指導部のクラス担当との関係が一段と密接になった。

「かつては『すり合わせ』でひざ詰めの検討を行っていましたが、今はそのころよりも、担任と進路指導部の距離が近づいたような気がします。決められた枠の中で話し合うのではなく、必要に応じて声をかけ合ったり、資料の確認をしたりする中で、生徒の進路実現に向けて力を合わせようという意識が、より強くなってきているのではないでしょうか」（殿岡先生）

08年度からは、センター試験の翌週に、3学年と進路指導部が連携して、小論文指導や面接指導を組織的・機動的に行うようになったのも、そうした教師の連帯意識の高まりを表している。

改革はひとまず成功したが、伝統的な取り組みにメスを入れることに、抵抗感はなかったのだろうか。改革を主導した渡辺先生に聞いた。

「進路指導委員会は本校の進路指導の中核であり、長い時間をかけて精密にシステム化してきました。これに手を加えることを考えたとき、制度を築き上げてきた先生たちの顔を思い浮かべたことは確かです。実際に制度を改変することによって効果は上がるのか、精度は維持できるのか、かえって事務量が増えるのではないかという不安もありました。それでも着手したのは、一つは進路指導部長の若杉先生が賛同してくれたこと、もう一つは取り組みを振り返るきっかけを与えてくれる若手教師の存在です。素朴に投げかけられた疑問によって気づかされることも多くありました。先生方の支えがあってこそ、大胆な改変を断行できたと思います」

若手教師の熱意は、先輩教師の心にも届いている。10年前、同校の進路指導部長として、第一線で進路指導を指揮してきた稲葉実校長は、現在の改革をどう見るのだろうか。

「伝統校といえど、時代と共に変わるのは当然のことです。かつては、進路指導部のリーダーシップが突出していて学年団の発言力が弱く、組織としての活力に欠けていた面がありました。私自身、進路指導部長時代に心がけていたのは、担任団との情報共有です。現在の改革につながる道筋をつける役目を果たせたと思っています。ただ、現在のシステムが学校文化として定着していくかどうかは、今後の成果次第です。時代に合わなくなれば、再び手が加えられるでしょう。そうした不断の見直しこそが、組織の活力につながっていくのではないでしょうか」

東京都・私立
実践女子学園中学校高校

キャリア教育・感性表現教育

25年後のビジョンを進路決定の柱とし生徒の意欲を高める

◎2009年に創立110年を迎えた伝統校。「品格 高雅 自立 自営」を建学の精神として、堅実にして質素、品格ある女性の育成を目指す。04年度から「学力改革」「キャリア教育」「国際交流教育」を3本柱とする学校改革を推進。08年度から「感性・表現教育」を加え、生徒の25年後を見据えた教育を展開する。

設立
1899（明治32）年

形態
全日制／普通科／女子校

生徒数
1学年約300名

08年度進路実績
国公立大には埼玉大、東京外国語大、横浜国立大、山口大、首都大東京など8名が合格。私立大には、青山学院大、学習院大、北里大、慶應義塾大、上智大、国際基督教大、東京理科大、早稲田大、立教大、同志社女子大、立命館大など延べ612名が合格。

住所
〒150-0011　東京都渋谷区東1-1-11

電話
03-3409-1771

Web Site
http://www.jissen.ac.jp/chuko/index.html

変革のステップ

背景
◎110年の伝統ある教育スタイルを継承しつつ、時代に合ったキャリア教育を行い、志願者層の低下を食い止めたい
STEP 1

実践
◎25年後の自分をイメージさせ、結婚・出産も含めたライフスタイルを考えさせる
STEP 2

成果
◎自分のライフデザインに沿った進路選択に変化し、理系志望者が倍増。また、校外活動に参加する生徒も急増
STEP 3

志願者数の減少を前に新たな特色づくりを模索

松田由紀子校長が20年以上に及ぶ公立校での教職経験を経て、母校の実践女子学園に迎えられたのは2004年4月のこと。同校では、99年度ごろから併設の実践女子大・短大以外の大学への進学にも力を入れ始め、国公立大や難関私立大に200人以上が進学していた。しかし、中学受験生の心をつかむまでには至らず、01年度ごろから中学入学希望者が減少し、比例して他大学への合格者数も落ち込み始めた。中学入学志願者の確保と高校生への進路指導の見直しが急務となっていた。松田校長は赴任当時を次のように振り返る。

「最も驚いたのは、私自身が在学中に行われていた女子教育の伝統を今日に至るまで継承していたことです。留学した生徒が、ホームステイ先から『このような機会を与えてくれた校長先生に感謝します』と手紙を送ってくるなど、感謝の気持ちをきちんと相手に伝えられる。公教育に長年携わる中で、学校や保護者、地域の教育力の低下に危機感を抱き続けてきただけに、とても嬉しく感じました。しかし、そうした魅力が、受験生に対してのアピール材料となっていなかったことも事実です。何よりも本校ならではの独自色を持って他校との違いを打ち出せていなかったこと

が問題でした。多くの私立校は、少子化を見越して90年代の初めから特色づくりに力を入れてきました。他校の改革が進むにつれて、相対的に本校の評価は落ち込んでいったのです。創立以来の伝統を継承しつつ、時代の要請に応じた教育体制をいかに再構築するか。それが、私たちに課せられた課題でした」

実践女子学園中学校高校校長
松田由紀子 Matsuda Yukiko
教職歴35年。同校に赴任して6年目。「行くに径（こみち）に由らず」

実践女子学園中学校高校
松下寿久 Matsushita Toshihisa
教職歴30年。同校に赴任して23年目。中等教育研究室長。広報部長。「モットーは『生涯一書生』」

実践女子学園中学校高校
甲斐由起子 Kai Yukiko
教職歴・赴任歴共に20年。学年副主任。「愛する心を忘れずに、一日一日を大切に生きたい」

実践女子学園中学校高校
井上一雄 Inoue Kazuo
教職歴35年。同校に赴任して3年目。キャリア教育部部長。「生徒にも自分にも『なれる自分よりもなりたい自分』と言い続けたい」

実践女子学園中学校高校
依田　泰 Yoda Yasushi
教職歴・赴任歴共に29年。中学2学年主任。「生徒に対してあらゆる先入観を持たず、リスペクトとディーセンシーを持って指導にあたる」

25年後の社会参加を見越したキャリアデザインを描かせる

05年度に、同校が新たな特色として打ち出したのは「6年間一貫のキャリア教育」だ。

「特色を出すためには、学習量を増やし、進学実績を高めることが近道だと思います。本校も改革の端緒では、学力強化月間や朝学習を実施し、課題プリントを充実させ、学習記録をきちんとつけさせる、といった施策を次々に導入しました。しかし、教師がすべてお膳立てして学習量を確保する方法だけでは、生徒が社会で生き抜く力は身につきません。少子化が進む中、女性が社会で果たすべき役割はますます大きくなります。自律的・能動的に社会参加する力をつけるために、自分自身の将来を見据えさせ、主体的に学ぶ意欲を持たせることが大切と考えました」（松田校長）

同校のキャリア教育のねらいと流れをまとめたのは**26ページ図1**である。中1～高1前期は人生全般を考えるキャリア教育、高1後期～高3はより大学進学にテーマを絞った進路学習・行事という構成だ。職業調べや志望大研究、進路講演会、インターンシップ、企業とのタイアップによるテーマ学習などを、主に「総合的な学習の時間」やLHRで実施する。

大きな節目は、高1前期に取り組む「ライフデザイン～『25年後の私』を考える」だ（**図2**）。生徒一人ひとりが、自ら設定したテーマに基づいて25年後までのキャリアデザインを描くレポート課題である。テーマには「地球温暖化」「iPS細胞とES細胞」「ゆとり教育」など、現代社会の課題が取り上げられている。

「生徒の25年後といえば、結婚、出産を経験し、子育ても一段落して、再び社会に参加しやすくなる年齢です。しかし、一度仕事の第一線から離れると、復帰しても補助的な役割に甘んじなければならない場合がほとんど。出産・育児を経験した女性が社会の中心的な存在になるのは難しい現状がある。また、少子化で就業人口が減少するこれからの時代は、女性の社会参加が一層求められます。本人が満足できる社会参加を果たすためには、高校生の時点で25年後の自分をイメージさせることが大切ではないでしょうか」（松田校長）

信念を持ったキャリア教育の成果の一つは、理系進学者の増加だ。仕事に直結した理系分野で学び、25年後の社会復帰を視野に入れたライフプランを高校生が描いているのである。学部分野別の合格者の割合について、06年度と07年度で比較したところ、工学系11人→38人、理学系6人→13人、看護・保健・医療系16人→30人と増えている。系統立ったキャリア教育は受験への向き合い方にも変化を及ぼしている。キャリア教育部長の井上一雄先生は、一連の取り組みの成果を次のように実感している。

＊プロフィールは取材時（09年2月）のものです

図1 実践女子学園のキャリア教育の流れ

高3		自立・自律的進学への取り組み **5つの能力を基に自ら進学に向けて実践する**	進学指導、教科指導、センター入試対策
高2			
高1	後期		学部学科研究 （進路の計画化と受験準備開始）
	前期	自らの意思で課題を解決する力 **課題解決能力**	キャリアデザイン、企業連携プログラム、「25年後の私」
中3		自らのプランを実行する力 **将来設計能力**	職業と学問、職業体験学習、「スペシャリストに学ぶ」
中2		職業・大学を理解する力 **情報活用能力**	職業調べ、ゲスト講演会、卒業生キャリア支援プログラム
		コミュニケーション能力 **人間関係能力**	
中1		自分を表現する力 **自己教育能力**	自分史作成、実践女子学園校祖調べ学習

「卒業生による合格体験談のスピーチでは、ある卒業生が在校生に向かって『受験勉強を通して人間的に成長できた』と語りかけてくれました。自分の人生の課題を真正面から受け止め、それを克服することによって成長できたと実感していると話してくれたのです。これで、私たちのキャリア教育の方向性は間違っていないと確信できました」

感性表現教育を導入し キャリア教育を補完

キャリア教育を始めて3年が経った08年度には、キャリア教育の補完として、豊かな感性を育む「感性表現教育」を導入した。創造的に物事に取り組む力やコミュニケーション能力を養うことによって視野を広げ、興味・関心を抱く心を育み、進路選択も幅広く考えられるようにすることがねらいだ。

感性教育は音楽・絵画鑑賞などの単発行事になりがちだが、同校の感性表現教育は教科の授業や学校生活の中で「視る・聴く・感じる力」を高めようとするところに特徴がある。既に多くの取り組みを実施していた同校にとって、教師に負担をかけずに実現することが必須条件だったからだ。そのため、日常の教育活動にひと工夫を加えること、元々行われていた取り組みに意識付けをして系統立てることが改革の中心となった。

具体的には、合唱コンクール（音楽科）、英文の暗唱コンテスト（英語科）、創作ダンス発表会（体育科）などを教科授業内で行う。また、休み時間や放課後に合唱部や箏（そう）曲部によるミニコンサートを開催。日々の部活動の成果を仲間に向けて発表させることによって、自己有用感を高め、相互理解を育むことができる。中等教育研究室長の松下寿久先生は、人生で重要な興味・関心や表現力を養いたいと話す。

「徹底的に受験勉強をさせればある程度の進学実績は出ますが、それだけでは生徒に社会で生き抜くための本当の力は身につきません。逆境に負けない人間に成長させることが本プログラムの目標です。キャリア教育と感性表現教育により、生徒は将来のビジョンを持つことができるので、大学4年間の学びの質を変えることも可能です。本プログラムには、視野が広く、目標を持った人に成長してほしいという思いが込められています」

日本語の聞き取りや俳句で「言葉の力」と「感性」を育む

感性表現教育の柱は「言葉の力を伸ばす教育」だ。代表的な活動の一つは、07年度から週1時間、中1～中3の国語の授業で行う「言語技術教育（日本語トレーニング）」で、「聞き取りトレーニング」と「要約」に取り組む。前者は音読した文章を聞き取って紙に書き写すもので、教師が200字程度の文章を3回音読（1度目は文節で区切ってゆっくりと、2度目は一文ごとにゆっくりと、3度目は通常の速さで）

し、生徒は聞き取った音声を書き取り、清書して提出する。後者は課題文を200字に要約し、自分の考えを指定の文字数で記述させるものだ。中学校2学年主任の依田泰先生は、この教育は国語以外の授業にも成果が表れていると話す。

「音声言語の処理能力を高めることは、PISA型読解力の向上に効果があるといわれています。ただ、本校では読み書き能力の向上を第一義としていません。ひたすら語りに耳を傾け、手を動かすことによって、『人の話を聞くフォルム』を体で覚えさせるのがねらいです。単調な作業なので、生徒はすぐ飽きてしまうかと心配でしたが、むしろ学年が進むに従って集中力が高まっているようです。ほかの授業でも板書だけでなく先生の話をノートに書き留める生徒が目に見えて増えてきています」

同じく中学校の国語で取り組む「俳句創作授業」は、言語技術教育と並ぶ、感性表現教育の大きな柱だ。俳人協会幹事でもある国語科の甲斐由起子先生は次のように述べる。

「俳句創作の一番のねらいは、命を愛おしむ心を育て、外の世界の小さな変化を感じる心を育むこと。『今まで雨が降ると気が滅入っていたのに、俳句を始めてから雨音が楽しくなった』といった感想も聞かれるようになりました。俳句で培った感性が、何気ない日常を充実したものに変えているのです」

ただ、俳句を専門的に教えた経験のある教師は同校にあまりいなかったため、国語科教師からは指導に対する不安の声も上がった。

「研修を兼ね、国語科の教師全員が自作の俳句を持ち寄って句会を開きました。身近な物事に目を向けて表現する俳句の楽しさに触れ、指導のヒントになればよいと考えました。先生方の作品を読み意外な面を知ることができ、教科内での相互理解も一段と深まりました」（甲斐先生）

教師自身が実際に俳句に触れることによって指導への不安が緩和されたのだ。更に、生徒にとっては新鮮であり、新たな価値観を醸成する機会になっている。

「試験で高得点を上げる生徒が、俳句でもよい点数が取れるとは限りません。大切なのは、学習以外でもきちんと評価される場面が保障されていること。勉強の成績を絶対的なものにはしないということが、今の時代には必要であり、特に小学校時代から受験のための勉強に身を置いてきた子どもたちにとっては重要なのではないでしょうか」（松田校長）

ここ数年、校内で自習する生徒の姿が目に見えて増えてきたため、07年度の夏休みからは自習室を開放している。キャリア教育導入前には見られなかった光景だ。大都市圏の塾や予備校がひしめき合う環境であっても、学校が安心して学習できる場所だと生徒に選ばれている証拠ではないだろうか。

一方で、学校外にも目を向ける生徒が増え、世界観が広がっていると、松下先生は評価する。

「日韓や日独といった高校生交流事業に自ら参加したり、海外留学派遣やボランティアなどを募ると、以前にも増して立候補する生徒が多くなりました。学内外のあらゆる場面で、生徒が当事者意識を持って取り組みに参加しようとする意欲を感じます」

「自立・自律」の芽は、生徒の中に着実に育まれつつある。

図2　「25年後の私」生徒のレポート（抜粋）

課題　25年後の世界と私～社会との関わりから～

【3】結婚

①ホームステイの受け入れ

私は結婚したらいったん専業主婦になってやってみたいことが一つある。ホームステイの受け入れだ。将来はますます海外からのたくさんの留学生が日本に来ると予想されるので私はその人たちをサポートするために、ホームステイの受け入れをし、異文化交流を図ってみたい。その際、留学生に日本語を教えたり、日本食の作り方を教えたりもしていきたい。

【4】25年後の世界と私（40歳）

①25年後の世界

25年後の日本は今以上に外国人がたくさん働き、外国人留学生がたくさん勉強しに来る、高度なグローバル社会になると予想される。こうした中で大学、会社、ホームステイの受け入れを通じ、身に付けた英語のコミュニケーション力や異文化理解力を大いに生かしていきたい。例えば、イベントの通訳ボランティアや国際企業への職場復帰である。

上記の課題は、現在から25年後の社会がどうなっているかを予測した上で、自分がどう社会とかかわりたいのかをまとめたもの。この生徒は、「外国人就労」について前半部分でまとめ、後半では自身の大学での学び、就職、結婚による退職と復帰のプランを示し、25年後の社会と自分とのかかわりについて系統立ててまとめている

福岡県公立
古賀竟成館高校 旧:福岡県公立古賀高校

進路意識向上

厳格な生徒指導と手厚い進路指導で地域の信頼を取り戻す

◎1951年設立の福岡県立粕屋農業高校古賀分校を前身として、古賀市などの2市1町（創立時は4町）が高等学校組合を組織して創設した「公立高校」。校訓は「自主 友愛 練磨」。09年4月に校名を変更し、普通科に進学に重点を置く特進コース、美術・デザイン系大学・学部を目指すベーシックデザインコースを新設した。

設立
1962（昭和37）年

形態
全日制／普通科・総合ビジネス科／共学

生徒数
1学年約200名

08年度進路実績
国公立大には山口大、北九州市立大に4名が合格。私立大には、中央大、東海大、関西外国語大、久留米大、第一薬科大、福岡大、西南学院大、九州産業大、立命館アジア太平洋大など延べ52名が合格。

住所
〒811-3103 福岡県古賀市中央2-12-1

電話
092-942-2161

Web Site
http://www.kogahigh.com

変革のステップ

背景
◎学校生活の規律の乱れをきっかけに入学者が減り、廃校の危機に立たされる
STEP 1

実践
◎生徒指導を厳格に行い、学校の雰囲気が落ち着いたころ、進路指導を充実させる
STEP 2

成果
◎改革実施5年後には、4年制大への進学者が3倍以上に増える
STEP 3

地域が設立した学校が一転、廃校の危機に直面

2002年4月、新規採用で福岡県公立古賀高校に赴任した丸山貴与仁先生は、教壇に立って驚いた。授業開始から数分後、最前列に座っていた女子生徒が化粧を始めたのだ。「何をしているんだ」と叱ると、生徒は「乳液を塗っているんです」と答えた。その生徒だけではない。授業中にもかかわらず、ガムを噛んだり食べ歩きをしたり。制服のシャツの裾を出し、男子は腰パン、女子は巻き上げスカート。生徒の生活態度は、規律とは程遠いものだった。

当時、同校は廃校の瀬戸際に立たされていた。近隣に県立高校がほとんどなかった1960年代前半、同校は古賀町ほか三つの町によって地域の人材育成を目的に設立された。県立高校が増え、志願者数が落ち込んだ時期もあったが、入試日程を変えるなどして、危機を乗り切ってきた。ところが、90年代に入り、再び成績上位の生徒の確保が難しくなった。同校に32年間勤める教頭の長友陛富先生は、こう分析する。

「入試制度という器を変えることで、学校は息を吹き返したものの、それも一時的なことでした。数年経てば、成績上位の生徒は県立高校へと流れてしまった。それは、我々教師が『生徒を育てる方法』を持っていなかったからだと思います。県立高校は毎年、教師

の異動があり、他校のノウハウを取り入れる機会も多い。しかし、異動のない本校では、他校の取り組みの情報がほとんど入ってきません。転任者から刺激を受けたり、ノウハウを吸収したりする機会が少なく、指導が我流に陥っていたのです。生徒の力を伸ばしきれず、中学生に『入学したい』と思ってもらえる学校になれなかったのだと思います」

福岡県公立古賀竟成館高校校長
大枝 均 Oeda Hitoshi
教職歴33年。同校に赴任して3年目。「『今日の努力は明日への成功』ということを生徒たちに伝えていきたい」

福岡県公立古賀竟成館高校教頭
長友陛富 Nagatomo Yoritoshi
教職歴33年。同校に赴任して32年目。「常に『前進あるのみ』という気持ちで、改革にあたっていきたい」

福岡県公立古賀竟成館高校
小倉浩義 Kokura Hiroyoshi
教職歴・赴任歴共に24年目。教務主任。「地道な努力が大きな結果につながるということを生徒に感じてもらいたい」

福岡県公立古賀竟成館高校
米原光章 Yonehara Mitsuaki
教職歴22年。同校に赴任して14年目。進路指導主事。「創造的な進路指導を展開し、生徒の志望を実現していきたい」

福岡県公立古賀竟成館高校
丸山貴与仁 Maruyama Kiyohito
教職歴・赴任歴共に7年目。生徒指導主事。「若さと情熱を忘れず、等身大で生徒たちにぶつかり、物事の是非を教えたい」

志願者数減少に伴い、生徒の問題行動が目立つようになり、地域から「古賀高校を廃校にしてほしい」という意見が公然と発せられるようになった。01年度には古賀高等学校組合教育委員会に「古賀高校活性化等検討委員会」が発足したが、議論の方向性は「廃校」に傾いていた。

この危機に直面し、「廃校となれば、創立以来、本校を支えてきた先輩方に顔向けできない」「一度、思い切りやってみよう」という声が、校内から沸き起こってきた。

厳格な生徒指導で学校の規律を回復

学校存続をかけた改革は、生徒指導の厳格化から始まった。01年度に福岡県教育委員会から、教頭（当時）として赴任した大枝均校長のリーダーシップの下、徹底的な生徒指導に着手したのだ。服装、カバン、頭髪、まゆ毛にそれぞれ基準を設け、違反1回ごとに、担任、学年主任、生徒指導主事、教頭、校長と順次、指導を受ける。累積10回で停学。停学といっても、生徒に学校で1～6時限の間、教師が1対1のつきっきりで学習課題を受けさせるというものだった。

生徒の反発は大きかった。基準と罰則は告知したが、生徒にしてみれば、シャツを出していただけ、眉を剃っただけでなぜ停学になるのかという思いがある。しかし、生徒のためにも厳しくしたと、教務主任の小倉浩義先生は話す。

「私自身、改革が始まった当初は、本当にこんなに厳しくする必要はあるのか、これが正しい教育なのか、と疑問に感じました。しかし、規則を厳しくしてから日を追うごとに生徒の生活態度が良くなっていくのを目の当たりにし、『生徒のためなら』と前向きに考えられるようになりました。それが確信に変わったのは、ある卒業生が学校を訪ねてきたときです。その生徒はこう言いました。『在学中は不満でしたが、就職して服装や挨拶、時間厳守の大切さを実感しました。ルーズなまま社会に出ていたら、きっと適応できなかったと思います』と。厳格な生徒指導が、当時の本校には必要だったのです」

更に困難だったのは、保護者への対応だ。大枝校長が教頭として赴任した年のこと。生徒を厳しく指導したところ、保護者から「子どもが学校に行きたくないと言っている。どう責任を取るんだ」と問責された。保護者との関係づくりは生徒指導の成否にかかわる課題だった。

「担任のクラスや顧問を務める部に所属する生徒の家庭を訪問するなどして、地道に保護者との関係づくりに努めました。問題が起きてから家庭訪問をしても、課題解決の話で手一杯で、それ以外の話ができません。普段からよい関係を築いておけば、問題が起きて

 ＊プロフィールは取材時（08年2月）のものです

も、学校側の意見に耳を傾けてもらえると考えました」（丸山先生）

こうした教師の地道な努力の積み重ねによって、厳しい罰則を課さなくても、教師の指導に従う生徒が多くなった。02年度に１００件ほどあった特別指導は、08年度には13件と激減した。

教師の意識改革により学年団の組織力が向上

「学校を変えるには、まず教師の意識から」は、改革の成功に欠かせない要素の一つだ。しかし、口で言うほど簡単ではない。特に同校は基本的に教師の異動がなく、生徒の兄弟姉妹や保護者も同校出身者が多い。「○○な先生」と貼られたレッテルを払拭するのは難しい。

そうした中、教師が果断な指導に踏み込めたのは、大枝校長の強いリーダーシップにあった。大枝校長は、ときに厳しい言葉を投げかけながら、教師に意識改革を呼びかけ、奮起を促した。

「『高校は義務教育ではありません。授業料を支払い、更に上の教育を求めている。我々教師がその責任を放棄したのでは、背信行為といわれても仕方がありません。もしやる気がないのであれば、教壇に立つ資格はない。生徒のためにすべきことに取り組んでほしい』と、先生方には何度も訴えました」

生徒指導部が主体となり、教師が動きやすい雰囲気をつくったことも大きかった。指導が困難な生徒は、担任や学年任せにせず、生徒指導部が前面に立って指導する。そして、生徒が落ち着くにつれて学年主体の指導に切り替えるというように、段階を追って生徒指導の役割を学年、担任へと下ろしていった。進路指導主事の米原光章先生は、指導が組織的になったと話す。

「生徒指導の苦手な先生でも、環境が変わればしっかりと指導できるようになります。以前は、生徒指導も進路指導も個々の教師に任されていました。今は何か課題が見つかれば、すぐに学年単位で動けるようになりました。学校を良くしていこうという先生方の意識の変化を感じます」

進路ガイダンスの充実で進路選択の幅を広げる

学校が落ち着き始めた06年度ごろ、同校は、進路指導の充実に着手した。まず取り組んだのは、生徒・保護者への進路ガイダンスの整備だ。

「本校の生徒の多くは、大学進学に偏見を抱いていました。大学は自分が行く場所ではない。なぜ大学に行かなければならないのか、行くメリットがない。このような偏見を持つ理由を考えたところ、保護者との会話や友だちからの情報が、生徒の進路選択を大きく左右していると気づきました。親は大学に行かなかったが、今まで立派にやってきた、と。生徒だけではなく、保護者にも進学の大切さを知ってもらい、進路選択の可能性を広げてもらう必要があると考えました」（大枝校長）

進路ガイダンスは、入学前の合格者登校日、1年生5月、2年生5月と3月の計4回。2年生の3月までに、生徒・保護者の進路意識を広げるのがねらいだ。当日は、保護者が来てよかったと思えるような、豊富な情報・資料を用意する。例えば、08年5月の2年生対象のガイダンスでは、60ページを超える冊子を配付。全国の大学進学率、同校の進路状況、各学部・学科

全員必読の朝読書

同校の取り組みの中で効果を上げているのが朝読書だ。「特定の本を強制して読ませるべきではない」という声もあり、多くの学校では本の選択を生徒に任せている。一方、同校では高校生に読ませたい本としてリストアップし、クラス全員が同じ本を読む。1か月に1冊のペースで年間約10冊。読後は感想文を提出、担任が保管し、卒業時に一括して生徒に返却する。段階的に難度の高い本に進めるよう、1年生は比較的理解しやすいもの、2年生は社会性が盛り込まれたもの、3年生は人間の内面を深く考察するものというように、本の選択にも工夫が凝らされている。

指定図書とする利点の一つは、普段では巡り合えない本に接することだ。「読書の楽しさを知った」「読み進むうちに登場人物の心理を考えるようになった」といった感想が寄せられる。また、クラス全員が同じ本を読むため、友だち同士で本について話し合うきっかけにもなる。生徒の内面を高めるだけでなく、クラスの一体感を醸成する上でも一役買っている。

の特徴と選び方、九州地区の大学推薦情報など、進路選択に必要な情報を網羅した。

保護者の全員出席も目指した。欠席した保護者用に別日程を設け、電話をかけて参加を呼びかけた。保護者全員が来るまで、同じ内容を7回実施したこともある。繰り返し呼びかけるうちに、なかなか学校に来なかった保護者も1、2回声をかけるだけで来校するようになった。

新校名、新コース、新校舎 三つの「新」で新たな船出

高まった進路意識を具体的な進路選択に結び付け、生徒が意欲を持って進路実現を目指すのを支援するために、面談指導も充実させた。以前は生徒個々に応じて面談を行っていたが、06年度からはすべての学級で年5回の二者面談、年2回の三者面談を実施することにした。とにかく生徒と話をする、それにより生徒の内面に迫り、進路実現へ向かう気持ちが途切れないようにできるのではないかと考えたのだ。

生徒の情報を、教師間で共有する仕組みも整えた。一つは「進路・個人成績表・面談表」だ。面談の記録、模試の成績、進路希望、出欠記録など、進路にかかわるあらゆる情報を記入する(図)。進級に伴い担任が変わっても、生徒の希望の変遷や保護者の意向を確認できる。生徒は、担任の指導の連続性を感じ、学校・教師に対する信頼感も高まる。

日々変化する生徒の状況を把握しようと、隔月で「拡大学年会」も行った。「家庭内に問題があるらしい」「病気を患ったようだ」など、面談表だけではわからない、日々の生徒の変化を学年団で共有する。

進路ガイダンスや手厚い面談により、生徒はより高い進路を目指すようになった。4年制大進学者数は、03年度に16人だったのが08年度には56人と増え、進路未決定者は33人から7人に減った。同校の大学進学者の多くは推薦入試やAO入試を利用するが、センター試験の受験者数も、07年度に15人だったのが、09年度は78人と5倍以上に増えた。最後まで頑張ろうという意識が生徒に浸透している表れだろう。総合ビジネス科の躍進も顕著で、日商簿記2級の合格率も5割を超えるなど、県下有数の実績を上げている。

そして、09年4月、同校は新たな一歩を踏み出す。校名を古賀竟成館(きょうせいかん)高校に変更、併せて普通科に「特進コース」と「ベーシックデザインコース」を設置し、進学重視の方向性を明確に打ち出した。3月には新校舎も竣工し、同校の新たな船出を内外に印象付けた。いつしか廃校論も影を潜めたが、教師には改革の手綱を緩める気持ちはない。いつ昔の古賀高校に戻るかわからない――そうした危機感が教師の意識を引き締めていると、米原先生は話す。

「中学校から学校説明会を依頼されるなど、地域からの信頼も回復しつつあります。しかし、特進コースで実績を出せなければ、再び廃校論が出てくるかもしれません。本校にとってはこれからが正念場。地域の人材育成という創立の理念に立ち返って、地域の期待に応えていきたいと思っています」

図 「進路・個人成績表・面談表」(記入例)

担任が面談での所見や模試の成績を書き込む。1学年A4サイズで、3学年分を1枚のシートにし、担任が代わっても引き継げるようにした。

高校生としての学習習慣を新入生に定着させる

入学したばかりの生徒に「本校の生徒として望むこと」をさまざまな角度から発信しているが、年々教師の言葉が生徒に届きにくくなっていると感じている教師は多い。「指示すれば、やる」生徒を「見守り、やる気にさせる」ことが必要になる中、言葉だけに終わらない「生徒を動かす指導」をさまざまなデータを使用しながら展開していきたい。

※データは、高校の先生方へのヒアリングを基に編集部が作成したサンプルです。

1 生活力と学力の相関を意識付ける

図1 生活力と学力の相関を意識させるシート

ダウンロード

●該当生徒の生活力特徴を○で記入

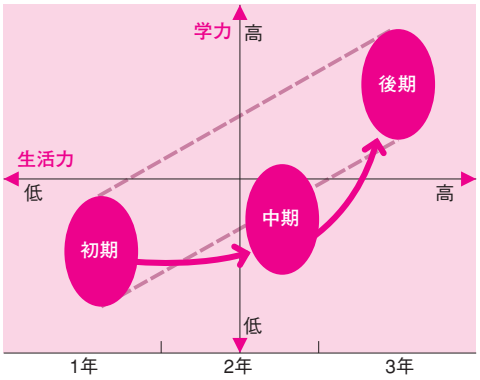
生活力を見る項目		Aさん・文系 進学先・●●大法学部	Bさん・文系 進学先・○○大経済学部	Cさん・理系 進学先・△△大医学部	Dさん・理系 進学先・■■大理学部
「起床・学習開始・就寝」の時間が固定できていた		○	○	○	○
遅刻をしなかった		○		○	○
挨拶がきちんとできた		○	○	○	
しっかりとした身だしなみだった		○		○	○
部活を最後まで続けた		○	○		○
全国模試の成績の推移	高1　7月　（記述・3教科）	56	55	72	64
	高1　11月（記述・3教科）	59	51	69	62
	高1　1月　（記述・3教科）	61	53	73	61
	高2　7月　（記述・3教科）	63	55	70	65
	高3　11月（マーク・5教科）	64	57	70	63

生活力を見る項目例

- チャイム着席ができた
- 質問によく来ていた
- 言葉づかいがきちんとしていた
- 積極的に発言をしていた
- 提出物の締め切りを守った
- 掃除をきちんとしていた
- 授業中の私語がなかった
- 予習復習を欠かさなかった
- 新書などの書籍をよく読んでいた

図2 高校生としての成長モデルを示して「みんなで頑張る気運」を高める

ダウンロード



●生活力に関する先輩のコメント

■予習復習を生活の一部にしよう!

予習をしてこないと授業がわからなくなる、と入学後すぐにわかったので、とにかく3年間予習だけは欠かさないようにしました。英語と数学両方がある日の前日は大変でしたが、予習だけで1日2時間は確実に勉強していました。それが受験勉強での粘りにつながったと思います。（●●大法学部合格）

■遅刻しないことが学力向上のカギ!

いま振り返ると、遅刻をしない人は落ち着いていたし、入試でも強かったです。私も真似してみましたが、事実、学力が伸びました。小さなことを大切にすることが大きな力につながると痛感しました。（▲▲大農学部合格）

ダウンロード このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。
http://benesse.jp/berd/ →HOME＞情報誌ライブラリ（高校向け）＞生徒指導・進路指導ツール集

プラスαの指導

データの提示に注意が必要

図1の資料は、卒業生のデータでもよいし、在校生のものでもよい。2年生ならば、1年時のことをまだ覚えている2年生の担任の協力を得るとよい。なお、このデータは、生徒個々に合わせて面談で活用するもの、もしくは学年団が自信を持って指導するための根拠として使いたい。そのまま生徒全体に見せてしまうと、生活習慣が身に付いていなくても成績が伸びているケース（あるいはその逆）を見つけ、それを生活習慣を正さないことの言い訳にしてしまうことがある。

面談では中学時代のノートも有効

最近の生徒は「勉強の仕方がわからない」と訴えることが多い。場合によっては、ノートの取り方や予習復習の進め方を細かく指導する必要がある。その際、面談で中学時代のノートを持参させると、そこに改善のヒントを見つけることが多い。単に板書を奇麗に写しているだけなのか、教師が言ったことから得た自分なりの気づきもメモしているのかなど、ノートの取り方から垣間見える勉強法を読み取って、どのように改善すればよいか実践可能なアドバイスを与えたい。

「学習→成果」を体感させる

高校生らしい生活習慣の重要性は、そのメリットを体感させることで生徒の内面に根付く。小テストを頻繁に実施し、予習復習の成果をきちんと評価していくなど生徒の納得度を高める工夫を学年で共有したい。生徒が「勉強しなくても何とかなる」といった誤解を持つことがないような学習環境づくりが教師には求められる。小テストの結果を、各自表に記入させ、視覚的に成果がわかるようにするなど、「学習→成果」を体感させることを、特に1学期の間は留意したい。

活用後のフォロー

◎1学期の中間テストのあと、入学当初に目標として掲げたことがどの程度できていたか、生徒個々に確認させる。図1の項目を抜き出して再度チェックさせるとよい。できていた部分をしっかり褒めて達成感を与え、できていなかった部分は、今後どのようにしていくか生徒に考えさせた上で、次の目標を生徒・担任で共有したい。なお、「生活習慣はしっかりしていたのに、成果が出ていない生徒」「ほとんど守れていないのに、成果が出た生徒」には、面談が必要。夏以降の成績動向に影響を与える要因が見つかる場合も多いので、その際には図2の成長モデルを改めて提示してもよいだろう。

データ活用のねらい

新入生にいち早く高校生としてふさわしい勉強の仕方を身に付けさせるために、各校では学習オリエンテーションや学習合宿などさまざまな取り組みを行っている。新生活のスタートにあたり高いモチベーションを持つ新入生は多いが、「高校生としてこうあるべき」という理想像を提示しても、具体的に何をどうすればよいのかわからないというケースも多い。

最近は中学時代に自宅での学習習慣を身に付けていない生徒も多く、学習のリズムをつくるのに、一定の時間がかかることが予想される。まずは高校生として最低限守るべきこと（国数英の予習だけはやろう、家庭学習をスタートする時間は固定しようなど）を厳選し、1学期の間、学年団で繰り返し訴えて守らせる。学習習慣定着のためには、生活習慣を整えることがどれほど大切かを、生徒、教師双方が改めて確認し、「必ず守ろう、やり抜こう」と意思統一できるデータが必要になってくる。

データ活用の流れ

高校生として守るべきことを掲げても、教師によって対応が異なれば、生徒は易きに流れてしまいかねない。学年として徹底させるべきものは何か、図1で卒業生や上級生の生活習慣と成績の相関を確認し、不易として指導を貫く項目を学年団で共有したい。図2は「高校生としての生活習慣が身に付けば、成績は自ずと上昇する」ことを示した概念図だ。全体の場で成長モデルを生徒に見せ、新生活を始める不安を「この高校の指導についていけば大丈夫だ」という期待感に変えたい。これを踏まえた上で、面談で図1を見せつつ、「予習の習慣が身に付けば、先輩のように良い成果が上げられるよ」など、生徒の特徴に合わせて具体的なアドバイスをする。生徒自身に「自分は高校生らしくなっている」「先生も認めてくれている」と感じさせることで次の成長につなげたい。

1年生1学期に生活力の重要性を周知する

教師間	対生徒
学年団で到達目標を共有し、意識をすり合わせる（図1、2使用）	学年集会で今後の見通しを紹介し、それを実現させる具体的な方策を考えさせる（図2使用）
▼	▼
教科指導、日々のクラス運営、面談などで生徒に生活力の重要性を徹底	生徒の特徴に合わせた面談での意識付け、具体的な方策の共有（図1を適宜活用）
▼	▼
模試反省会などの機会に、どの項目がどれだけ達成できているか学年団で検証（図1、2使用）	面談などで共有した目標に生徒が着実に向かっているかどうか、日々の生活場面での観察・検証

2 クラスの力で学習習慣の定着を図る

図3 学習の記録表

ダウンロード

●**学習内容について**＜現状を知り、課題を克服するために＞

月（4/20）	火（4/21）	水（　／　）	木（　／　）
16:00 17:00 英語 18:00 19:00 数学 1:00 2:00	数学 英語		
学習時間 英（2）　国（1）　数（1）			

あえて余白の多いシンプルな表にしておくと、生徒がこの表をどう記入しているかからもその生徒らしさが見えてくる

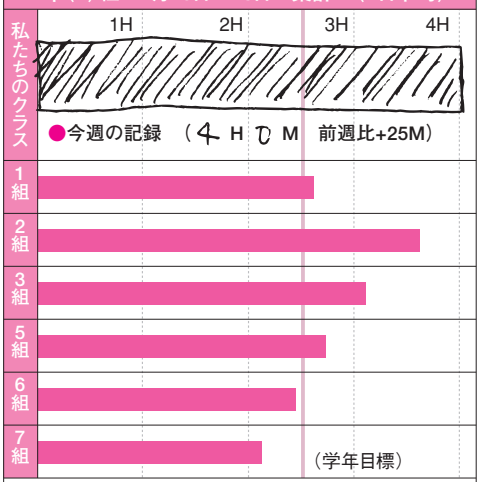
記録表の裏面に、その時期の学習の目標などを記載しておけば、生徒は学習に取り組む上での留意点などがわかる。

※学習の記録表はこのほかにもさまざまな形式があります。小誌ウェブサイトをご覧ください。

図4 クラス別学習時間調査

ダウンロード

1年（4）組　4月20日～26日の集計　（1日平均）



●前週からの取り組み

朝のSHR前の15分を活用

●今週のクラスの取り組み

帰宅直後の1時間を有意義に

●目標　（　H　M　今週比+10M）

図5 高校生らしさを感じたとき

■授業が始まったあとの、あの学校全体の静けさ

授業が始まったら、学校全体がホントに静かになることに驚いた。中学とは大違い！　授業開始のベルが鳴る前にほとんどの人が着席していたのを見て「僕も頑張ろう」と気合いが入った。

■ゴミが落ちていない

古い校舎なのに教室内はとても奇麗で、整然としていたことに最初ビックリした。1年生の教室よりも、先輩の教室の方が奇麗だったのも意外だった。大人だなぁと思った。

■来校者に対するさわやかな挨拶

校内で来校者とすれ違うときには、立ち止まって大きな声で挨拶をするのがうちの高校の伝統。どの学年でもそうしているので一体感がある。この高校を選んでよかったと感じた。

■ミスを笑わない仲間たち

自分なりに考えた結果なら、どんな発言も先生方は真剣に受け止めてくれる。仲間もミスを笑わない。自分の考えを恥ずかしがらずに言えることに、高校生になったんだと感じた。

ダウンロード　このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。
http://benesse.jp/berd/　→HOME＞情報誌ライブラリ（高校向け）＞生徒指導・進路指導ツール集

ウェブサイトからダウンロード！ 生徒指導・進路指導ツール集

Benesse® 教育研究開発センター

http://benesse.jp/berd/

生徒指導ツール集　検索　クリック！

HOME→情報誌ライブラリ（高校向け）→
生徒指導・進路指導ツール集でご覧ください

加工可能な資料がダウンロードできます！

今回のテーマと関連する過去のバックナンバーも併せてご活用ください！　右のウェブでご覧いただけます。

- ●2006年4月号「入試結果データの見せ方」
- ●2007年2月号「新入生への意識付け」
- ●2008年4月号「1年生を高校生にする意識付け」

プラスαの指導

「できる自分」を体感させる

学習時間調査は生徒の実態把握の機会ではあるが、１年生の生徒にとっては「１日○時間の勉強もやってみれば意外とできる」ことを体感するチャンスである。クラス別の学習時間調査に向けて「ほかのクラスに負けないよう、必ず○時間は勉強しよう」など半ば強制的にでも経験させることも「できる自分」を実感させるためには必要だ。「やろうとしない限りはできないこと」をやり遂げたとき、担任からかけられた一言が生徒に自信を与えることもある。

生徒同士の気づきを引き出す

図３の記録内容をSHR時に生徒同士でチェックさせ、仲間がどんなふうに学習時間を確保しているか、自分が真似するならどんなところかなどを考えさせる。すぐ横にいる仲間の生き方に刺激を受ける場を提供して、クラスを生徒の内面から活性化させたい。なお、学習記録表の記入の仕方そのものに、生活習慣に対する生徒の意識が透けて見えることがある。勉強できていない自分に焦りや不安を感じている生徒を学習記録表から見つけ、面談などで学習時間確保のアドバイスを与えたい。

不安や悩みの共有・解消でクラスをまとめる

高１の１学期は学習や生活、部活動などに対して、何らかの不安や悩みを抱えながら過ごしているものだ。しかし、何かを求めようとするからこそ、悩んだりつまずいたりするのだから、やろうとしている自分がいることをしっかり認識させ、仲間と共に歩く姿勢をクラスに醸成したい。「こうあるべき」というスタンスの発信ではなく、「現状を認めつつ、できることをやっていこう」という雰囲気をクラスにつくっていきたい。

活用後のフォロー

◎入学時は同じように見えたクラスも、１か月もすればそれぞれの雰囲気が生まれてくる。各担任は、クラスの現状は、自分のねらい通りになっているのか、生徒の気づきなど予想外のことがあったのかなどを最初の定期テストを契機に振り返ることが重要だ。そして学年会議などで、好調なクラスはどんなことに取り組むことで雰囲気づくりをしているかを共有したい。クラスの雰囲気は１学期には固まってしまい、それ以降に改善するのは容易ではない。各クラスごとの個性は存在しても、最後は「学年として目指すべきもの」を一人ひとりの教師が忘れないようにしたい。

データ活用のねらい

多くの新入生は、高校生活に大きな期待感と高い目標意識を持って入学してくるものだが、実際の高校生活と自分の想像との間にギャップを感じ、やる気が低下してしまうこともある。そんな生徒の内面に刺激を与える方策として、この時期はクラスの活性化が重要になる。

１学期にさまざまな学校行事を実施してクラスや学年の結束力を高めようとする学校は多いが、学習習慣の定着においても、クラスや学年集団の力を利用したい。学習記録や学習時間調査などを学年、クラスで集計したデータを生かして、「頑張ろうという気持ちのある集団」「１人の努力がみんなによい影響を与える集団」に自分が属していることを実感させ、学習習慣の定着とクラスの活性化につなげていきたい。

データ活用の流れ

学習記録などは、記入することが目的ではない。日々の取り組みの改善点を生徒自身に見つけさせ、どう取り組むべきかを考えさせる場として活用したい。また、図４の学習時間調査を行うときも、クラスで到達目標を設定し、「みんなで頑張っていくんだ」という雰囲気をつくる。担任も漠然とした言葉ではなく、「帰宅直後の１時間の使い方が重要」など学習時間を増やす方法を具体的に示し、意識の向上を図りたい。

なお、「高校生らしさ」のイメージが教師と生徒にギャップが生じていることもある。新入生から「高校生らしさを感じたとき」を聞き取った図５で、高校生らしさを感じる新入生の着眼点や感性を、教師がリアルタイムで把握しておくことがクラスへの仕掛けを考える上でのデータベースとなる。

高校生らしさを実感するための指導フロー

1. 学習記録をつけ、生徒に過去の自分を振り返らせ、これから何をすべきか明らかにさせる。担任は日々点検し、コメントしたい（図3使用）
2. HRを活用して、定期的にクラスで改善点を共有。具体的なクラス目標を考えさせる
3. 学習時間調査の集計や考査結果などを適宜紹介して、改善の度合いや成果をクラスで共有（図4使用）
4. 高校生らしさは、仲間と刺激し合う日々の生活の中にあることを、体感、理解させ、次のテーマに意欲的に取り組ませる（図5使用）

「柔らかい物質」の特性を解明し新機能材料開発へ道筋をつける

千葉大大学院 融合科学研究科 ナノサイエンス専攻 上野信雄研究室

パソコンや携帯電話など電気製品の心臓部といえるIC（集積回路）を構成する半導体は、シリコンや金属などの「無機材料」で作られるのが一般的だが、新たな材料として「有機材料」が注目されている。従来は主に化学の分野で研究されていた有機材料だが、千葉大の上野信雄教授は早くから有機材料の可能性に着目し、物理学の視点からアプローチ。その機能を解明しようと、新たな実験方法を開拓しながら研究を重ねている。

フローチャートでわかる「上野研究室」

大学院生等の出身学科

- 物理学科
- 応用物理学科
- 化学科
- 応用化学科
- 電気電子工学科
- 物質工学科

など

◎研究には物理学・化学の両方の知識が必要なため、両分野の関連学科の出身者が多い。千葉大からの内部進学者が多いが、他大学や海外の大学から派遣されてくる学生や研究者もいる。一方、研究室から海外の大学や研究所に赴く学生もいる。

研究にかかわる学問と研究内容

◎有機材料は主に炭素を主成分とする物質の総称。半導体の性質を持つ有機材料を研究対象とし、分子集団の中にある電子の機能の解明、新しい機能を持つ分子の研究、工学的展開などに取り組む。

研究成果と社会のかかわり

- 省エネルギー
- ディスプレイ
- 太陽電池、照明

など

◎有機材料は軽くて加工しやすいという特性があり、ディスプレイの省電力化に有効な素材といわれている。開発が進めば、窓に薄く貼り付ける太陽電池、壁自体が光る照明装置などへの活用も考えられる。環境・エネルギー問題への対策として有効なため、国は財政を投じて研究を支援している。

上野信雄 教授 Ueno Nobuo

東北大大学院応用物理学専攻博士課程修了。
学術振興会奨励研究員、千葉大工学部助手、
ドイツ電子シンクロトロン研究所AvH研究員、
千葉大工学部助教授等を経て、
現在、千葉大大学院融合科学研究科教授。
千葉大先進科学センター長、
文部科学省グローバルCOEプログラム
「有機エレクトロニクス高度化スクール」拠点リーダーを兼務。

研究のきっかけ

物理学の有機材料への応用にいち早く着手

電気製品の大半に組み込まれている半導体は、金属やシリコンなど「硬い」性質の無機材料で作られています。しかし現在、炭素を主成分とする「柔らかい」性質の[1]有機材料を用いる研究が盛んに行われています。

中でも注目されているのは、半導体の特性を持つ有機材料である「有機半導体」です。これを用いた代表的な製品は家庭にも普及しつつある[2]「有機エレクトロルミネッセンス（有機ＥＬ）テレビ」で、電気を流すと光る性質を持つ有機材料を、ディスプレイに応用した発光デバイスです。有機半導体の利点には、①エネルギー効率が良く消費電力が少ない、②低温度で加工できるため省エネルギーで製造費を抑えられる、③軽いため輸送費や改修費を抑えられる、④溶媒が溶けやすいため大面積化しやすく材料のリサイクルが容易、という点があります。将来的には、照明やテレビ、広告ディスプレイ、太陽電池などへの活用が期待されています。

この次世代の半導体といわれる有機材料の性質解明が、私たちの研究テーマです。今でこそ最先端の研究の一つですが、私の大学時代、物理学では無機材料の研究が主軸でした。性質が安定しているため、実態の観察や実験が行いやすいからです。一方、有機材料は構造が複雑なため精密な研究が難しく、主に化学の分野で研究されていました。無機材料には皆が研究している安心感がありましたが、私は他人と同じ研究をすることに疑問を抱き、大学院では逆に有機半導体を研究対象にしたのです。

ところが、有機半導体の研究には質のよい真空が必要でした。分子から飛び出す電子を調べる際に、大気中では物質の表面がすぐに酸化したり、付着した汚れから電子が飛び出したりするため、目的とする分子の電子を正確に捉えられないからです。質のよい真空をつくる装置には莫大な費用が必要なので、私は別の方法として、炭化水素の一つである[3]ナフタレンを使う方法を考えました。ナフタレンには、固体から直接気体に[4]昇華する性質があります。大気に触れても表面が次々と昇華し、常に新しく奇麗な表面が出てくる。これなら質のよい真空がなくても研究ができると考えましたが、真空中では昇華によってすぐに試料がなくなるため、失敗しました。試行錯誤を繰り返した結果、少し大きな分子を用いたところ実験に成功。化学の見地を物理学に取り入れた瞬間でした。

１９９０年代に入り、アメリカの研究者が[5]「ＡＩｑ３」という分子を用いた有機ＥＬを開発。これが研究の転換期になりました。また、太陽電池への応用の観点から環境・エネルギー問題に貢献する領域と期待され、有機半導体は物理学と化学で注目される研究となったのです。

研究の概要と成果

世界で初めて振動する分子と電子の結合を確認

多くの有機材料は弱く結合した分子の集団です。結合が弱いと、個々の分子の性質と集団としての性質が表れ、面白い特性を発揮します。個性のある人たちが協力して大きな力を発揮するのに似ています。

その特性は分子中の電子の動きで決まります。私たちの研究は、ナノレベルで電子の性質を解析し、有機

写真1　有機金属の界面の電子構造を観測する光電子分光装置。上野教授と大学院生が製作し、改良を重ねた手作りの実験機器だ

材料の性質を解明することです。電子が分子間を移動する間に、どう影響し合うか、電子はどのくらいの速さで移動するのかを、[6]光電子分光装置などの計測機器を使って観測します。これらはバイオ機能の解明の出発点になるとも考えられています。

03年度に「超高性能有機ソフトデバイスフロンティア」として21世紀COEプログラムに採択され、5年間研究を続けてきました。重要な発見がいくつかありましたが、中でも衝撃的だったのは、電子の抜け殻であるホール[7]という物質と、振動している分子が結合している状態を、世界で初めて確認したことです。有機材料中の分子と電子の動きは複雑で計測が難しく、多くの研究者が観察は不可能と考えていました。

成功要因の一つは、助手や学生らが精密に実験データを積み上げ、その実験データを見たとき、微妙な違いを見逃さなかったことにあります。実験途中に報告を受けたとき、データは分子とホールの結合を示していませんでした。しかし、いつもとは少し違うデータが出たため、もう少し研究を進めたら、結合の様子を確認できるかもしれないと考え、更に精密な実験を重ねたのです。

振り返ると、実験の積み重ねによってデータを見る目が養われていたこと、日々頭の中で理論を構築し、チームメイトとさまざまな可能性を語り合ったことが大きかったと思います。諦めずに粘り強く追究する姿勢と研究室のチームワークが、画期的な成果を生み出したのです。

高校生に伝えたいこと

学問の楽しさを味わうことが、進路の可能性を広げる

私は高校時代から物理が好きで、将来は宇宙物理学の研究者になりたいと考えていました。大学受験時に高校の先生から「趣味と仕事は違う」と言われましたが、初志を貫き物理学科に進みました。しかし、大学でも教授に「宇宙物理学の世界で食べていける人は世界でも一握り。最初から自分の可能性を狭めてどうする」と諭され、最後にまた「趣味と仕事は違う」の一言をいただきました。

私はいったん宇宙への夢を横に置き、目の前の学業や研究に励みました。大学での学びや経験などを通してさまざまな領域に触れ、次第に宇宙にとどまらない幅広い物理学の魅力に引かれていったのです。物理学の研究者でありながら、化学との分野間の壁にとらわれず横断的な研究を進める素地にもなりました。

最初に抱いた興味はもちろん大切です。ただ、「自分の将来はこうじゃないといけない」と思った途端に、その人の可能性は極めて小さくなると思います。また、役に立つ・立たないという観点で学問や進路の選択を狭めるのではなく、多様な好奇心を育て、学問そのものの楽しさ、苦労した後の充実感を経験してください。それが、将来の進路の幅を広げることにもつながると思うのです。

写真2　研究室には、ドイツ、アメリカ、中国など海外から訪れる研究員が在籍。研究室内では日常的に英語が飛び交う

用語解説

❶有機材料
主に炭素を主成分とする物質の総称で、人体をはじめとする生体材料やプラスチックなどを構成する「柔らかい」物質。無機材料にはない柔軟さや軽さが特徴。

❷有機エレクトロルミネッセンス（有機EL）
有機発光材料の薄膜を用いた発光ダイオードで、電気を流すことで発光する。ディスプレイや照明などへの応用が進んでいる。

❸ナフタレン
芳香族炭化水素の一つで、昇華性を備えた白色結晶。防虫剤に使われる。

❹昇華
固体が液体にならず直接気体に、逆に気体が固体に変わる物理変化。

❺Alq3
アメリカのイーストマンコダック社のC.Tang博士が開発した発光デバイスに利用された分子。有機材料からなる発光装置が低い電圧での発光を可能としている。

❻光電子分光装置
紫外線やX線を照射し、物質の電子構造を多角的に観測する装置。

❼ホール
正孔。半導体の結晶などで、電子の不足によってできた孔のこと。正の電荷を持つ電子のように振る舞い、電気伝導の担い手となる。

大学院生が語る

周囲とのコミュニケーションがよい成果につながる

藤井邦治 さん
Fujii Kuniharu
千葉大大学院自然科学研究科
多様性科学専攻博士後期課程3年
〈岡山県・私立金光学園中学高校卒業〉

Q なぜこの分野に進んだのですか？

A 高校時代、唯一好きだった科目が物理でした。身のまわりで起きていることをきちんと理論的に説明できる。その一方で、極小の素粒子から無限の宇宙空間まで、非日常的な世界も研究の対象とするダイナミックさがある。とにかく物理が勉強したい――。そんな思いから、千葉大の物質工学科に進みました。

上野先生の研究室を選んだのは、研究室見学のときに、先輩がとても楽しそうに実験機器について説明してくれたのが、印象に残ったからです。デモンストレーションとして実験を見せてもらった装置は、今、自身の研究に活用しています。「エネルギー損失分光装置」という実験機器で、固体表面に低速電子線を照射することで、表面で散乱されエネルギーを失った電子を計測するものです。私はこの装置を使い、分子の振動そのものを調べています。

Q 研究を進める上で大変なことはありますか？

A 実験装置のトラブルが発生したときです。実験では、真空という特殊な環境をつくらなければなりません。しかし、外から見ただけでは、装置の中が質のよい真空状態になっているかどうか、機材に汚れが付着しているかどうかがわかりません。装置の状態を目で見て見当をつけたり、消去法で問題を一つずつつぶしていったりして解決していきます。メンテナンスをしっかりしなければ、有効な結果は出ないとつくづく感じます。

コミュニケーションの大切さも、研究室で学んだことの一つです。機器についての知識不足から、自分では解決できない問題もたくさんあります。普段から周囲の人と言葉を交わしたり、相手が困っているときは進んで助けたりしなければ、いざというときにだれも自分を助けてくれません。人に話を伝える、人の話を聞く。どこの世界でも同じだと思いますが、周囲としっかりコミュニケーションをとることは、よい成果を上げるために欠かせない要素だと思います。

Q 高校生へのメッセージをお願いします

A 私は高校時代、あまり勉強が好きな方ではありませんでした。それよりも、友だちといる時間が楽しくて、悩みを相談し合ったり、勉強を教え合ったりしたことを覚えています。

いま思えば、そういう時間を持てたことは、自分の成長にとても役立ったように思います。ときに助け合い、ときにライバル心を燃やす中で、辛い受験勉強も乗り越えられましたし、私自身、大人になっていくことができたような気がするからです。受験勉強はもちろん重要ですが、友だちと過ごす時間も大切にしてください。

もう一つ重要だと思うのは、身のまわりのことに対して、常に疑問を持つことです。当たり前のことを当たり前だと思って流してしまわずに、「なぜこうなるのだろう」と常に疑う視点を持つ。そうすれば、知ることの楽しさをより実感できると思います。

好奇心の一つひとつが、自分を高めてくれる道しるべになるという気持ちをもって、改めてまわりを見回してみてはどうでしょうか。

大学院での藤井さんの1日

- 9:00 起床
- 10:30 **実験開始** 実験計画は、ほぼ1か月おきに立てる。順番やタイムスケジュールなど、事前にきちんと計画を立てておけば主体的に研究を進めることができる。
- 12:30 昼食
- 18:00 **デスクワーク開始** 暗くなってからの方が集中できるため、実験データをまとめたり、論文を書いたりするのはいつも夕方から。
- 20:30 夕食
- 1:00 **帰宅** 大学から10分ほどの所に自宅があるので、毎日深夜まで研究を行う。

生徒に「本当の力」をつけ夢の実現に挑む心を育んでいきたい

秋田県立能代高校教諭　柏谷浩樹
Kashiwaya Hiroki

30代教師の指導力向上は、学校活性化には欠かせない。今後、学校で中核を担っていく30代教師が抱える指導上の課題や目標についてのインタビューを通して、指導力向上のヒントを探っていく。

大学卒業後も見越して「本当の力」をつける授業を模索

私が今、課題としていることは二つあります。一つは、生徒にとって「本当の力」になる指導とはどのようなものかということです。20代のころは、「大学に合格できる学力にまで、とにかく鍛え上げればよい」と思い指導していました。生徒に「あれをしなさい」「これくらいしなさい」と声をかけ、外部模試の合格判定が悪かったら「勉強が足りないんだ」と激励していました。厳しく指導しても生徒はついてきましたし、志望校にも合格していきました。私自身、そうした経験を通じて、大学入試のための教科指導、進路指導の方法とタイミングは少しずつ身に付いてきました。

ただ最近、大学に合格しても、指導したことが本当に生徒の人生に役に立っているのかと考えるようになりました。前任校では、年輩の先生と組んで、ある学年の国語を担当しました。その先生は、授業で「私はこの文はこういう思いで書かれていると思う」「みんなはどう思うか」「ここが不思議なんだよな」と自分の思いを生徒に投げかけ、生徒の関心を引き出していました。特に課題を出さずとも、生徒が自ら考え、調べて次の授業で発表するような授業展開となっていたのです。

かしわや・ひろき
教職歴12年。赴任3校目となる同校に赴任して5年目。担当教科は国語。1学年担任。進路指導部副主任。3学年担任はこれまでに3回務めた。

◎大正14年に開校した伝統校。普通科と理数科を一括募集し、2年進級時に普通科文系・普通科理系・理数科の2科3コースに分ける
◎教員数…非常勤も含めて55名　◎1学年生徒数…約230名
◎2008年度進路実績…国公立大には、北海道大4名、東北大3名、秋田大28名、筑波大4名など133名が合格。私立大は、東北学院大、青山学院大、上智大、明治大、早稲田大などに延べ211名が合格。短大12名、専門学校12名、就職8名。

自分の授業を振り返って、生徒に「知りたいから、面白そうだから勉強しよう」と思われる授業をしていただろうか。新任のころは国語の面白さを伝えたいと情熱を持っていたのに、いつの間にか大学進学だけに向いている自分がいました。

私は、定期考査などで生徒が予想通りの得点を上げないと、「あれほど授業で教えたのに、何を勉強していたんだ」と思っていました。ところが、ある日、年輩の先生が授業で「みんなは一生懸命勉強したのに、私の教え方が悪かった。申し訳ない」と生徒に謝ったと聞きました。その先生に理由を尋ねると**「結果で生徒を責めてはいけない。まず生徒が理解できる授業ができていたのかを考えなければならない」と言われました。私ははっとしました。学力が上がらないのを生徒の勉強不足のせいにするならば、私という「教師」が**

いる意味はないと気づいたのです。

生徒の関心や意欲を引き出せるような授業とはどういうものか、まだ私はつかめていません。いろいろな先生の考えや思いを聞いて、自分なりの指導を見つけたいと思います。

学校組織の中堅として後輩にいかに伝えるか

二つめの課題は、校内での自分の役割です。本校には20代の先生が多く、私は年齢層としては中間に位置します。赴任して5年が経ち、生徒に指導すべき内容や時期に応じた指導を把握した今、年下の先生に助言する場面も増えてきました。職員会議などで発言する機会もあり、学校組織の中で自分が果たす責務の重さを感じています。

当然ですが、生徒は「能代高校」に入学してきます。能代高校としての指導を、どの先生からも受けられるようでなければならない。生徒の状況に応じて方法が変わることもありますが、学校としての目標は不変で一定以上の水準を保つことが学校としての力となるからです。教師が代わっても、今ある指導をどう継承し、改良していけばよいのか。先輩に指導を仰ぎ、一緒に考えながら、その課題に向かっています。

赴任歴も年齢的にも中間に位置する私に課せられた責務の一つは、20代の後輩に、先輩から教わったことや自分が20代で体験したことを伝えることです。同世代との話では、悩みを共有し、共感し合うことはできますが、解決までには至りにくいと思います。私自身、教科指導でも学級経営でも、悩んだときには何でも先輩の先生に聞きました。やはり、その課題を克服した先輩と話し、自身の経験を聞いたり、知恵を貸してもらったりすることが、解決に導いてくれるものだと思います。

若いころは先輩の先生に「最近どう?」などとよく声をかけてもらいました。**「相談にいつでも乗るよ」と言われても、気恥ずかしかったり、こんな簡単なことを聞いてよいのかと思ったり、なかなか言い出せないものです。でも、声をかけてもらえれば「実は……」と話しやすくなります。**忙しいからとただ黙々と仕事をするのではなく、今では私から後輩になるべく声をかけるようにしています。

夢の実現に挑戦する力をつけさせる指導が目標

教師は生徒の夢の実現を助ける職業です。私はそのあと押しができているのかなと自問しています。以前は、合格判定でC・D判定が出たときに、遠回しに生徒に諦めさせていたこともありました。生徒の失敗を恐れ、教師の私が安全な道を選んでいたのです。

大学進学は人生においてかなり重要な選択です。夢をあと押しする教師が、諦めさせてよいはずがありません。リスクは伝えながらも、生徒の気持ちを大切にし、人生から逃げずに自分で考え、選ばせるようにしています。たとえ不合格でも、挑戦した生徒は強くなり、甘えがなくなって、その経験を人生の力にできるのではないかと思うようになりました。

教科指導においても進路指導においても、生徒の「本当の力」になる指導ができるようになること。これが今の私の課題です。そして、組織的にも生徒の抱える課題にどう挑んでいくのかを思案し、行動していく立場になってきていると感じています。

このひと言から学んだ —『VIEW21』を読んで—

Q 2008年度の『VIEW21』が取り上げた学校事例で印象に残った記事と先生の言葉を教えてください。

A 2008年9月号の特集「『自立する高校生』をどう育てるのか」が最も印象に残っています。群馬県立前橋高校・丸山先生の「生徒が自分自身の生活を振り返り、生活スタイルを変えようと意識し始めたとき、自立に向けて一歩を踏み出していると思います」という言葉。これは生徒の自立を実感できる具体的な場面として、印象に残りました。生徒の変化に気づく視点を教えていただきました。また、鳥取県立倉吉東高校の先生方の「手を離すタイミングは難しい」「生徒への指導は（中略）徐々に緩めますが、それでも完全に手を離すことはありません」も共感した言葉です。本校での取り組みを「生徒から手を離していく」という観点から、もう一度考えるきっかけになりました。

注　バックナンバーはBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。http://benesse.jp/berd/→HOME＞情報誌ライブラリ（高校向け）

＊プロフィールは取材時（09年2月）のものです

一斉授業から学び合う授業へ――静岡県立沼津城北高校の挑戦

「学びの共同体」の導入で学力向上を目指す

生徒の気質や学力の変化等、高校現場にはさまざまな課題がある。その中で、「教師の課題意識をどのように改革へ結び付けるのか」「新しい取り組みをどのように導入していけばよいのか」といった声は多い。そこで、2009年4月、全学年で授業に「学びの共同体」を導入することに踏み切った静岡県立沼津城北高校を取材し、課題意識と導入までのプロセスを追った。

一斉授業の行き詰まりから「学びの共同体」導入に期待

「学びの共同体」は、学校を学び合いの場にし、生徒一人ひとりの学ぶ権利を実現する授業実践だ。生徒同士の学び合いを通して、自己の知識を整理したり、多様な考えに接したりして、学習意欲や学力の向上をねらいとする。従来は小・中学校の取り組みというイメージが強かったが、近年、高校でも取り入れる学校が増えてきた。しかも、進路多様校だけでなく、地域を代表するような進学校にまで広がりつつある。

静岡県立沼津城北高校が2009年4月から全学年の授業で「学びの共同体」を導入するきっかけとなったのは、従来の一斉授業では立ち行かなくなった現状を打破したいという思いからだった。国語科担当の浅川典善教頭は、今の生徒の印象を次のように話す。

「国語の授業の中心は教師と生徒との対話ですが、それができなくなってきたと強く感じています。以前は、生徒に発問をし、そこで出てきた新しい視点を別の生徒につなぐ、という広がりが生まれていました。しかし今は、対話にならず、ほかの生徒につながらない。結局、一方的な講義形式になるという悪循環に陥っています。関係性の豊かさも学習意欲も失われていると感じています」

鈴木良平校長は、「他校でも学年が上がるたびに学力層の幅が広がる傾向にありますが、本校でも1年生7月と11月の模試を比べると、その傾向がはっきり見られ、学年が進むにつれ拡大しています」と分析する。

「学びの共同体」が学力向上の起爆剤になるのではないか――。そうした期待が教師の背中を押したのである。

「定員割れ」の現実を前に他校にはない特色を打ち出す

学び合いによってコミュニケーション能力を高め、温かい人間関係を築いてほしいという思いも、「学びの共同体」を導入する背景の一つだ。鈴木校長は、生徒の友人関係の希薄さを次のように指摘する。

「本校にも挨拶や対人関係が苦手な生徒が見られます。クラスメイトと話すこともないまま黙って授業を受

けて、1日が終わると1人で家に帰るとしたら、学校に魅力を感じられるわけがありません。学び合いを通して人とのかかわりを学んだり、1人でいるクラスメイトにさりげなく声をかけたりするような助け合う関係を校内につくり上げたい。それも『学びの共同体』の導入を決意した大きな理由の一つです。助け合うところに学ぶ意欲も生まれ、社会で必要な人間関係力も育まれていくはずです」

同校にとって、大きな課題はもう一つあった。08年度高校入試で定員割れとなり、再募集をしたが19人の欠員のまま新学期を迎えたのである。もちろん、同校は努力をしていなかったわけではない。特進クラスの設置（09年度入学生より廃止）、週3日間の0限授業、初期指導による学習習慣付け、勉強合宿、放課後講習・週課題などを行ってきた。例年10人前後が国公立大にも合格している。

しかし、定員割れとなってしまった――。特色ある取り組みを導入し、他校との差異化を図らなければならない。そうしたねらいも、「学びの共同体」を導入する動機の一つだった。

教頭の乗松修司先生は、中学校教師と話す中で自校の特色が明確でないと知った。

「学校説明会のときに中学校の先生によく言われたのは、『進学指導に力を入れていることはわかりますが、沼津城北高校の特色が見えません』という指摘です。他校も行う進学指導だけでは、中学校にアピールできない現実がありました。『学びの共同体』の導入を決めてからは、本校の特色が明確になり、興味を持って話を聞いてくださる中学校も多くなると思います」

中堅の公立高校にとっては、並大抵の取り組みでは他校との差異化を図れない時代なのかもしれない。

周到な準備によって徐々に取り組みの意義を浸透

「学びの共同体」は、従来の授業スタイルとは大きく異なるため、その効果を認めつつも、導入に二の足を踏む学校は少なくない。

一見して異なるのは机の配置だ。原則として、すべての生徒が壁に背を向けて「コの字型」に座り、必要に応じて4人1組のグループをつくって課題や討議に取り組む。コの字とグループとを切り替えるタイミング、生徒の主体的な参加を促す声かけや課題など、生徒が学び合える雰囲気をつくれるかどうかが、教師の腕の見せどころとなる。

沼津城北高校では、教師が取り組みやすいよう、導入の公表までに綿密な計画を立てた（P.44図）。

08年6月、「学びの共同体」で成果を挙げている広島県立安西（やすにし）高校（本誌08年9月号参照・注）の公開授業に、英語と数学の教師を派遣。その様子を7月末の職員会議で報告し、授業研究に取り組む旨を伝えた。「刺激を軽く与えた」という鈴木校長の表現通り、この時点では新しい取り組みが動き始めていることを示唆するにとどめている。

もっともこの時点で、鈴木校長の胸中には迷いがあった。本当に、「学びの共同体」を実現できるのか、大学入試に対応できる学力は身に付くのか――。鈴木校長を決意させたのは、9月に県下一斉に実施する中学生進路希望調査で、前年度と同じような志望動向になっていると判明したことだった。

静岡県立沼津城北高校校長
鈴木良平 Suzuki Ryohei
教職歴34年。同校に赴任して2年目。
「生徒のやる気を育てるきっかけをつくってあげたい」

静岡県立沼津城北高校教頭
乗松修司 Norimatsu shuji
教職歴27年。同校に赴任して2年目。
「生徒には、謙虚に学び続けて、将来立派な社会人になってほしい」

静岡県立沼津城北高校教頭
浅川典善 Asakawa Fumiyoshi
教職歴27年。同校に赴任して2年目。
「生涯学び続け、社会に貢献できる人材を育てていきたい」

静岡県立沼津城北高校
岩田香緒里 Iwata Kaori
教職歴12年。同校に赴任して2年目。
「高校生活において、社会に出ても困らない力を身に付けてほしい」

School Data

設立	1902（明治35）年
形態	全日制／普通科／共学
生徒数	1学年200名
2008年度進学実績	国公立大は、北見工大、群馬大、静岡県立大などに9名が合格。私立大は青山学院大、東海大、日本大などに延べ283名が合格。
住所	〒410-0012 静岡県沼津市岡一色875
電話	055-921-0344
Web Site	http://www.shizuoka-c.ed.jp/numazujohoku-h/

注　バックナンバーはBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。http://benesse.jp/berd/　→HOME＞情報誌ライブラリ（高校向け）

＊プロフィールは取材時（09年2月）のものです

鈴木校長は、「学びの共同体」の提唱者である東京大大学院の佐藤学教授に協力を依頼し、10月半ばの職員会議で次年度からの導入を表明した。

当初は1年生のみで実施する予定だった。2、3年生は従来の授業スタイルになじんでおり、コの字型の授業は受け入れにくいだろうと考えたからだ。

しかし、12月に佐藤教授を招いたときに、「高校生は協同学習にすぐ慣れますし、『学びの共同体』は先生方も幸せにしたいという趣旨があります。授業のプロとして、自分のスタイルをつくることです。始めるなら一斉に取り入れる方が効果があります」との助言を受け、全学年での実施を決めた。

図　「学びの共同体」導入までのスケジュール

「学びの共同体」への可能性が教師たちの参画を促す

導入決定を受けて、教師はどのように感じたのだろうか。前年6月、安西高校への視察に参加し、12月の校内の研修会において「学びの共同体」の提案授業を行った英語科の岩田香緒里先生は次のように話す。

「私は教師になったころから、和訳・座学中心の授業に疑問を抱き、授業では対話や活動を重視してきました。ですから、『学びの共同体』の授業スタイルにはすぐになじめました。課題はコの字型の机の並びでどのように指導していくかです。生徒同士の顔が見えるので一体感が生まれやすいというメリットがありますが、もっと生かせるように、発言のさせ方などを工夫していきたいと思います。また、中学校の授業見学などを含めて、ほかの先生方の授業を見る機会がかなり増えました。特に他教科の授業を見ると、学び合わせるタイミングや与える課題など参考になることが多くあり、勉強になりました」

佐藤教授の指導を受けた08年12月以降、岩田先生ばかりではなく、ほかの教師も積極的に協同学習の授業を試行し始めた。

「ほとんどの生徒は、授業中黙って教師の説明を聞き、まじめにノートを取っています。しかし、定期考査や模試では点数が取れない。どの学校も同じですが、先生方の意識には、自分たちが努力するほどには、生徒の実力が伸びないことへの疑問や不満があるのではないでしょうか。また、12月の岩田先生の提案授業で学び合う生徒の表情を見て、『学びの共同体』の可能性を感じたことも大きかったのではないかと思います」と、乗松教頭は指摘する。

「大学入試環境が激変し、従来とは違う学力対策や受験へのアプローチもあるはず。登山にもいくつかのルートがあるように山頂への道を変えた。先生方もそう感じているのではないでしょうか」と浅川教頭は話す。

09年度は、学年ごとの授業研修会を3回、全体の公開校内研修会を2回実施する。また、個々の教師が、他の導入校の同じ担当教科の教師と交流を深めていく。同校の改革はこれからが本番だ。課題解決につながるのか、その行方を注視したい。

高校での「学びの共同体」の意義

真摯に学び合う生徒の姿が教師のやる気に火をつける

東京大大学院教授
佐藤 学
東京大大学院教育学研究科修了。教育学博士。専門は教育学、教育方法論。日本教育学会会長。

高校でも4年ほど前から「学びの共同体」に取り組む学校が出てきました。導入効果は大きく、1学年の半数以上いた中退者が1桁にまで減った高校もあります。高校での導入校は急速に増え、今では週に2、3校から講演依頼や導入の相談があります。08年に東京大教育学部附属中等教育学校で行った公開授業には、800人以上の高校関係者が集まりました。進路多様校だけでなく、進学校でも一斉授業が成立しづらいという現実があると思います。

「学びの共同体」の成果が出てきた

「学びの共同体」の取り組みを始めてから12年ほどが経ちました。現在、全国の国公立小・中学校の約1割が導入しています。

ある程度想像はしていましたが、これほどの成果が表れるとは考えていませんでした。荒れた学校でも「学びの共同体」を始めると、子どもの問題行動はうそのように減り、不登校者の7～8割は学校に来るようになりました。学力も向上しましたが、私が最も嬉しく感じるのは、子どもの学び合う姿がとても素敵なことです。子ども同士が助け合いながら真摯に学びに向き合っているのです。

授業研究を学校経営の柱に

「学びの共同体」のコンセプトは、子どもの学ぶ権利を保障すること、授業を見せ合うことで教師同士も学び合いながら成長を促すことにあります。つまり、授業研究や校内研修を学校経営の中心に据えるです。

授業研究を日常的に行う小・中学校に比べ、自身の授業をほかの先生に公開する機会が少ない高校では導入しづらい面があります。旧態依然とした授業に疑問を感じても、学校全体の授業改革につなげる機運が生まれにくい土壌があると思います。

しかし、「学びの共同体」の授業研究では「教え方が良かった・悪かった」とは問いません。「どこで生徒がつまずいたのか・支え合っていたのか」などを検証します。「教師」の視点ではなく、「生徒の学び」という視点から検証するのです。この方法は高校にも受け入れられやすいのではないでしょうか。

高校は教える内容が多く、大学受験も控えているため、授業進度の遅れを気にする先生もいますが、授業の構成を変えれば解決できます。今の授業に「学び合い」をプラスしたら時間は足りません。基本語句や公式などの要点をまとめた教材を配り、教えたいことは前半30分を使ってグループでまとめさせ、残りの20分でより発展的な課題に挑戦させるのです。

学び合う生徒の姿が教師の励みに

高校での実施が、小・中学校に比べて有利な面があります。高校生だけあって、のみ込みが早く、すぐに授業のねらいをつかんでくれることです。これは、進学校の生徒でも、生徒指導が難しい学校の生徒でも同じです。生徒は謙虚に学び合い、困っている生徒をしっかり支えています。「学び合い」をあと押しするのは、だれよりも生徒自身なのです。

生徒が夢中で課題に取り組むため、教師も自ずと指導に熱が入るようになります。これも大きな利点です。現在のご自分の授業に疑問を感じているならば、是非、「学びの共同体」の授業を見学してほしいと思います。そして、実践してみてください。すぐに生徒の変化が見えるはずです。

すべての先生がよい授業、生徒の心に響く授業をしたいと考えています。教師だけで変えようとするのではなく、生徒と共に学び合い、一緒に授業をつくっていくという気持ちで取り組んでいただきたいと思います。

日本の中学・高校生が受検しているスコア型英語テスト　シェアNo.1※

検定 GTEC for STUDENTS

新・英語指標

※年間40万人以上の中学・高校生が受検しています。

先生方に選ばれる理由

◎スコア制　絶対評価スコアで、英語力の伸び（技能別）を正確に測定
（発信力を問うライティングは海外で採点・添削し、返却します）

◎フィードバック性　きめ細かいデータと教材を、先生・受検者に提供
（検証・指導・事前事後学習に役立ちます）

◎資格性　日米の大学合わせて約200校以上での入試優遇・単位認定

上智大学外国語学部教授
吉田研作

「GTEC for STUDENTS」を使った日韓中の東アジア英語教育調査から、日本の英語教育の強みや課題、またセルハイ（SELHi）の取り組みの成果と可能性が見えてきています。英語の授業評価や成果の検証、また、指導目標、到達指標を設定するための外部指標の一つとして、技能別スコア制の同テストを活用することができるでしょう。

東京外国語大学大学院教授
根岸雅史

絶対評価尺度のスコアで英語力の伸びを実感できること、またそのスコアの意味付けとして何ができる（can-do）かを具体的な言語活動で記述している点が「GTEC for STUDENTS」の特長です。このような英語検定テストの客観的な指標・スコアを使って、中学・高校卒業段階の到達指標などの設定も可能となると考えます。

GTEC for STUDENTS　詳しくはホームページでご覧いただけます　http://gtec.for-students.jp/

GTEC（ジーテック） for STUDENTSについてのお問い合わせ
0120-350455　受付時間／［祝日・年末年始を除く］　月～金 8：00～19：00　土 8：00～17：00
株式会社ベネッセコーポレーション　岡山本社　〒700－8686 岡山市北区南方3－7－17

PUBLIC RELATIONS

『Eゲイト』に初めて、シリーズ誕生

カナ発音つき

コアイメージ

※紙面は見本です。
※約87%に縮小しています。

英文の組み立てが分かる! 基本構文

通常、辞典の文型表示では「主語」は省略します。しかし、「主語を立てて、動詞を置く」という英語の“基本のキ”を、学習者は案外すっ飛ばしてしまいます。この辞典では、1,700以上の重要構文に、このようなていねいな記述をほどこしています。

アンダーラインで、文型と英文の対応がわかりやすい

コアがわかれば、英語の感覚を理解できます!

代表編者
NHK教育テレビ
「新感覚★キーワードで英会話」
「新感覚★わかる使える英文法」講師
田中茂範 教授

学習のポイント

文法書は、どうしても体系立てた説明を行い、その中に重要な学習事項を書きます。しかし学習者にとっては、重要情報が埋もれてしまいわかりにくいようです。「学習のポイント」は余分な情報はそぎ落とし、基本中の基本だけ載せました! このページだけで、ポイントの確認が完結します。

ポイントだけなので、パッと見てわかる!

単語の学習と、文法の確認がつながる!

エクスプレス Eゲイト英和辞典 Express E-Gate English-Japanese Dictionary*

慶應義塾大学教授・田中茂範、
静岡県立大学教授・武田修一、
信州大学教授・川出才紀　編
B6判変型、2色刷、本文1,696ページ
収録語数 48,000語　＋巻末和英 9,000語
定価:2,835円（本体2,700円＋税5%）

世界で初めての、認知意味論に基づく辞典

Eゲイト英和辞典 E-Gate English-Japanese Dictionary*

慶應義塾大学教授・田中茂範、
静岡県立大学教授・武田修一、
信州大学教授・川出才紀 編
収録語数 75,000語＋巻末和英9,000語
定価:3,255円（本体3,100円＋税5%）

携帯版
定価:2,940円（本体2,800円＋税5%）

Benesse®
ベネッセの辞典

株式会社ベネッセコーポレーション 辞典企画課
■お問い合わせ先 0120-5108-58
見本のご請求、内容に関するお問い合わせはフリーダイヤルまでお願いいたします。

http://www.benesse.co.jp/jiten/
各種検索サイトで「ベネッセの辞典」と検索してください。
ベネッセの辞典 検索
[ベネッセの辞典]ホームページでは、より詳しい情報を掲載しております。

読者のページ

VIEW'S SQUARE

Volume I

教育最前線からのホットな話題を紹介します

新課程を学校の目標づくりに浸透させる

2月号の特集「新課程のポイントと高校教育への影響」を読んで、質・量・レベルの再検討を含め、新課程の趣旨を学校の目標づくりに浸透させる必要があると感じた。生徒の自主性を育成するという観点からも、校内で議論を深め、従来から取り組んでいる週末課題を見直していきたい。各回の授業や課題の目的を明確にすることや、生徒に意欲を持たせる工夫、家庭の協力を得る努力を惜しんではならないと思った。

［徳島県・匿名希望］

現実的な問題として新課程を捉える

2月号の特集「新課程のポイントと高校教育への影響」には、ゆとり教育からの転換と、それに伴う学校現場の対応について予想される点などが書かれていた。興味深く、また現実的な問題として読んだ。数学や理科の先行実施への対応は、すぐにでも始めなければ後手に回ってしまうと危惧を抱いた。

［長野県・匿名希望］

理想と行動が改革のカギ

2月号の「指導変革の軌跡」で取り上げられた3校に共通している内容は、やはり我々教師が高い理想を持ち、それに向かって行動を起こすことが重要だということだ。そして、教師全員が協力・団結し、行動することによって、生徒一人ひとりが変わっていくということを実感できた。教師が異動しても、同じシステムが続くような体制づくりも重要であると感じた。

［鹿児島県・匿名希望］

改革の「その後」が指導の参考になる

2月号の「指導変革の軌跡」の福井県立美方高校のように、一度取り上げられた学校の「その後」の記事が興味深かった。「失敗を教訓とすることが歴史を学ぶ意味」と捉えるならば、改革をしてよくなった学校が、何らかの原因でまた元に戻ったという例も、指導の参考になるかもしれない。

［岡山県立邑久高校・杉山義則］

「前向きな引き継ぎ」で新年度をスタートさせる

2月号の「生きたデータの見せ方・つくり方」は指導法の一つの提案として読ませてもらった。特に目標3「『前向きな引き継ぎ』を意識する」のシートは良い資料だ。生徒たちは「褒められる」喜びと「なぜ新しい先生が知っているのか」という驚きにより、4月からの生活に張りが出るであろう。

［静岡県・匿名希望］

30代世代の記事に注目

「30代教師が語る指導の悩み」が印象に残った。30代は企業では一番の中核となる。学校現場では、全国的に数の少ない世代ということもあり、リーダー育成の観点から危惧している。私はそういう30代の奮起に期待しており、次年度も、30代の育成などの記事には大いに興味がある。

［福岡県立小倉東高校・上森哲生］

教師川柳

卒業式　目は感涙か　花粉症か

埼玉県・氷川の社

『VIEW21』へのご意見・ご感想をBenesse教育研究開発センターのウェブサイトからお寄せください

下記の手順でアクセスしてください。

① 「Benesse教育研究開発センター」のトップページの「情報誌ライブラリ」の「高校向け」のプルダウンメニューをクリックしてください。

②画面右端の『VIEW 21』の表紙の下にある「読者アンケートにご協力をお願いします」をクリックしてください。

③入力フォームが表示されますので、ご記入の上、送信してください。

小誌に対してお寄せいただいた「全国の読者の声」がウェブサイトでご覧いただけます。

http://benesse.jp/berd/

編集後記

「教師は生徒の夢の実現を助ける職業」。新コーナー「30代教師の情熱」にご登場いただいた柏谷先生の言葉です。教師とは、何と難しく、しかしすばらしい職業なのだろうと改めて感じました。生徒と、生徒の未来に向き合い続ける先生方に元気をお届けできるような『VIEW21』であり続けられるよう、本年度も全国の先生方の「思い」を運んでいきたいと思います。（佐藤）

VIEW21 4月号 Vol.1　2009年4月1日発行

発行人　新井健一
編集人　原 茂
発行所　(株)ベネッセコーポレーション　Benesse教育研究開発センター
印刷製本　大日本印刷(株)
編集協力　(有)ペンダコ
執筆協力　中丸満、長谷川敦
撮影協力　川上一生、谷口哲

◎お問い合わせ先
VIEW21編集部
〒163-1422　東京都新宿区西新宿3-20-2　東京オペラシティタワー22階
電話　03-5371-1238

©Benesse Corporation 2009

VIEW21 2009 June 6月 Volume 2

次号は6月6日発行（予定）
『VIEW21』高校版は年6回の発行です